

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十四課 なみのおとが きこえてきます：
「いく」「くる」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002793

日本語教育映画解説14

基礎篇第十四課

なみのおとがきこえてきます

—「いく」「くる」—

国立国語研究所

前 置 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。

この第十四課「なみのおとが きこえてきます」の解説の担当者は、次のとおりである。

企画・編集	日向茂男(日本語教育センター日本語教育教材開発室)
本文執筆	高田 誠(// 日本語教育第一研究室)
資料1., 資料2.	日向茂男(// 日本語教育教材開発室)

昭和56年3月

国立国語研究所長

林 大

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成——場面を中心として	4
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	4
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての解説	4
3. この映画の学習項目の整理と練習問題	32
3.1. 「行く」「来る」について	32
3.1.1. 「行く」と「来る」とを弁別するパラメータ	34
3.1.2. 「行く」「来る」の用法について	38
3.2. 動詞による連体修飾	42
3.2.1. 3.2.の(i), (ii), (iii)について	42
3.2.2. 3.2.の(iv)について	44
3.2.3. 3.2.の(v)について	46
3.3. 練習問題	49
4. 参考文献	59
資料1. 使用語彙一覧	65
資料2. シナリオ全文	89

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「なみのおとが きこえてきます」は、その第十四課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次の通りである。

昭和53年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

- 石田 敏子 国際基督教大学専任助手
- 川瀬 生郎 東京外国語大学附属日本語学校教授
- 木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授
- 窪田 富男 東京外国語大学教授
- 斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

- 野元 菊雄 日本語教育センター長
- 武田 祈 日本語教育センター日本語教育教材開発室長
- 日向 茂男 日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員

この映画「なみのおとが きこえてきます」は、日向茂男の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体の企画・編集を行い、執筆には日本語教育第一研究室の高田 誠が当たった。また資料1., 資料2.

は、日向茂男が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画の主要な目的は、「行く」と「来る」についてのさまざまな用法を提示し、その意味・用法の理解をはかることにある。それは次の三つに大別される。

- (1) 本動詞としての「行く」「来る」の基本的用法
- (2) 「目的語（主に動詞の連用形）＋に＋行く／来る」の用法
- (3) 「___ていく／くる」の用法

この映画を独立した補助教材として利用する場合には、ここで「行く」「来る」の用法に関するある程度の体系的学習が可能となるが、もちろん学

習者の学習段階等にあわせて、以上の(1)(2)(3)のどれかを大きく取り上げて学習を進めてもよい。ただ、この映画は、「____ていく／くる」の意味・用法の理解に重点を置いて、作成されている。この基礎篇の流れの中でこの映画を利用する場合には、これまでの映画の中で(1)や(2)を扱ってきたので((3)に附随的に触れている映画もあるが)、その(1)(2)の復習をしつつ、さらに(3)の学習へと進むことになるわけである。

そのほか、この映画では、

(4) 動詞による連体修飾の用法

が導入されている。連体修飾成分については、「名詞＋の」、連体詞、形容詞、形容動詞等の用法をある範囲で学習した後、動詞による連体修飾の用法を導入するのが一般的な順序のようである。したがって、ここで連体修飾成分の幾つかの型を整理・復習しておくことも学習のひとつに加えてもよい。そこに新たに(4)の学習項目が加わる。(4)は次に、動詞による連体修飾成分を持つ「こと」や「の」学習に発展するための段階である。続く学習項目として「ことがある／ない」や「ことができる」が考えられるが、それらの学習には別の映画「みずうみへ いったことがありますか」や「あのいわまで およげますか」が用意されている。なお簡単ではあるが、映画解説6「しずかな こうえんで」(P.36～P.37)に連体修飾についての説明がある。

また、

(5) 「のです」の用法

(6) 提題の「は」の用法

等も副次的な学習項目として取り上げることができる。(5)は、今までの映画でも学習項目となっているものだが、この映画を独立教材として利用する場合、ここでもその学習を進めていくことができる。「のです」については、映画解説10「もみじが とても きれいです」(P.31～P.33)に多少の解説がある。(6)は、今までの映画で扱われなかったわけではないが、学習項目として取り上げるには、この映画中の幾つかの用例がそれにふさわしいものとなっている。したがって、2.2.の項で適宜解説を加えた。「は」については、映

画解説2「さいふは どこにありますか」(P.14～P.26)に詳しい説明がある。

2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下の通り扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって、場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それを更に小場面に分ける時には、Ⅰ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①②……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、'の印をつけ、①'②'……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には、'''''の順で'を重ねていく。
3. なおこの映画中に直接現れていない文や語句を例示する時には、〔1〕〔2〕……のように〔 〕付きの番号をつけ、その変形引用には、上記2.の場合同様'印をつける。文や語句を束にして例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもあるが、ここでは積極的にはその問題に触れない。なお①②……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

この映画の主題は、「訪問」である。「訪問」とは、用事等があって他人の家に行くことだが、特別の用事がなくてもあいさつとか顔出しとか御機嫌伺いとかいったことで人の家に行くこともある。「訪問」には、さまざまなバリエーションがあり、一様にとらえることは難しいが、手みやげを持っていく習慣はいまだに根強いようである。この映画に描かれる「訪問」は、余り固苦しくない関係にある先輩、後輩の訪問である。ここには、二つの「訪問」がある。一つは、後輩たちの住む寮に、今は水産研究所で働いている先輩が久しぶりに訪ねてくる。この先輩は、かつてこの寮に住んでいたような感じである。映画的には、この部分は主題の提示であり、また登場人物の紹介とも

なっている。主人公である佐藤は、久しぶりに先輩に会い、研究所を訪問する許しを得る。二つめの「訪問」は、佐藤の研究所訪問である。映画的には、この「訪問」が主要部分を占めている。

先輩が寮を訪ねて来て、また佐藤が自分の寮から研究所へ「移動」という設定であるから、そこには「行く」「来る」という移動の動詞がさまざまに現れることにもなるわけである。

この映画は、大きく分けて次の六場面に分けられる。

- I 佐藤の部屋で
- II 談話室で
- III 駅前広場で
- IV 車の中で
- V 研究所で
- VI 波打際で

この六場面は、I、IIが寮の中、III、IVが研究所へ行く途中、V、VIが研究所で、というふうにさらに大きな三つのまとまりになる。この映画を利用するにあたっては、そのまとまりごとに学習を展開していくことも可能だし、またそのそれぞれを独立した教材として学習を進めることもできる。5分という映画の枠を三分割して、学習上の便宜をはかっている点は、十二課「おみまいに いきませんか」と同様で、基礎篇の映画として典型的な構成をめざしたものである。

以下、各場面の順にその場面の説明、そこに現れている言語表現についての解説を加えていく。

I 佐藤の部屋で (①～④)

自室で勉強している様子の佐藤のところへ、友人の井上がやってくる。そして、ある人物の来訪を告げ、談話室へ来るように誘う。

佐藤「①はい。」

井上「②佐藤さん、談話室へ来ませんか。」

③いま山田さんが来ているんです。」

佐藤「④そうですね、すぐ行きます。」

①の「はい」は、この場合、ドアをノックされたことへの返事。「ええ」とはならない。今までの映画にも同じ用法の「はい」がある。②の「来ませんか」は形の上からは否定の疑問であるが、機能としてはていねいな誘いかけである。詳しくは、映画解説12「おみまいに いきませんか」(P.27~P.34)を参照してほしい。この場合の「来る」は佐藤が自室から談話室へ移動することであるが、話し手の井上の側から見て、動作主の佐藤が話し手の井上の方へ近づくことを示している。話し手は、実際には、佐藤の部屋の入口にいるのであって、談話室へは「行く」でもよいと思われるが、ここで「来る」を用いたことによって、話し手の意識の上での発話場面は談話室にあると受けとられる。③の「来ている」の「動詞+ている」の形は、映画解説11「きょうは あめが ふっています」で詳しく扱われている。この場合の「来ている」は、山田が「来る」という動作を行った結果、現在ここ(談話室)にいるという意味を持つ、いわゆる、結果の状態を示している。

④の「すぐ」は、時間的な間隔を置かずという意味。「すぐ右」「すぐうしろ」のように空間の間隔を置かずという意味で用いられることもある。

II 談話室で (⑤~⑭)

佐藤が談話室に入ってくる。山田はすでに座って待っている。山田が佐藤より年下であれば、立ち上がって迎えるところであるが、山田は「先輩」とみえ、立ち上がらない。このへんの行動は、年齢、とくに学生などでは学年などの要因に相関がある点注意すべきである。

II-1 久しぶりの再会 (⑤~⑨)

山田がこの寮を訪れるのは、久しぶりのことである。まず、先輩の山田を迎えた佐藤からあいさつをする。

佐藤「⑤こんにちは。

⑥久しぶりですね。」

山田「⑦本当に久しぶりですね。」

佐藤「⑧山田さん、最近は、お忙しいですか。」

山田「⑨ええ、少し忙しいです。」

⑤のあとに「いらっしゃい」などを続けることが多かる。⑥の「久しぶり」は形容動詞であるが、連体形は「久しぶりな」とはならない。過去にしばしば生じ、あるいは、存在していた動作や状態が、その後とぎれていて、今回、それがかなりの時間的空白ののち再現されたとき、言語主体がその再現を何らかの感慨を以って評価する表現。言語主体の評価が negative なできごとには用いにくい。また、時間的空白がどの位から「久しぶり」と言えるかも主観的なものであるが、一日や二日ではあまり用いられない。ていねい表現として「お久しぶりです」もある。

⑧の「お」は、相手の山田の状態を示す「忙しい」に付したもので尊敬語である。「最近」は「このところ」「ちかごろ」などと同じく、時の名詞の副詞的用法。目の前に座っている人に向かって、「山田さん」と呼格を用いるのはやや不自然か。特に、目上の人に向かって直接名前を呼ぶのは、敬語行動としてやや厳しく見れば失礼なことに属すると思われる。きき手が目上の山田であると示すことが、「お忙しい」という敬語表現の役割の大きな部分を占めているのである。

⑨の「ええ」は、目下のものが目上のものに用いるとやや失礼である。「はい」「はあ」が適当であろうか。この場合の「すこし」は、一般の日本人社会では「すこし」を意味しない場合が多い。日本人の一般的な言語行動としては、自らの世界に属することがらのプラスの評価はできるだけ控えめに、マイナスの評価はできるだけ誇大して表明、自らのきき手、あるいは、敬意対象者に対する相対的位置関係を低めようとするのが少なくない。「忙しい」という状態は、日本社会ではプラスの評価を持った状態と見られるので、まず、本当に忙しくなければ、「いいえ、ひまです。」とか「いいえ、忙しくありません。」と即座に否定し、本当に「少し忙しい」状態であれば、

「いいえ、それほど忙しくはありません。」などと、やはり、否定的な返事をするものと思われる。実際に、「猫の手も借りたいほど」忙しくても、「ええ、忙しいです。」と単純に応じるのは、日本人の言語行動としては、やや「はしたない」ものと感じられよう。それにもかかわらず、⑨で「少し忙しい」と答えたのは、したがって、客観的な度合いとして「非常に忙しい」状態にあると想像され、きき手もそのように受けとり、また、日本人の言語行動としては、そのように受けとることが求められるわけである。ただこの場合は親しい先輩、後輩の間柄にあると考えられるので、非常に率直な返答が返ってきたとも考えられる。

このような、実際の状態とそれを表す言語表現との不一致、あるいは、不整合をもって「日本人は本当のことを言わない」とか「態度があいまいである」とかいった「批判」をする向きが少なからず見られるが、それは、いわゆる「文化の型」の問題である。なお、よく言われることだが、英語でも自分自身のことを「忙しい」と表現してはならないようである。

II-2 研究所を訪問する相談 (⑩~⑭)

先輩の山田は、ある研究所へ勤めているらしい。佐藤は山田の研究所を訪ねてよいかどうかきき、次に訪問の時期を話しあう。

佐藤「⑩今度、研究所へ行ってもいいですか。」

山田「⑪ええ、どうぞ。」

⑫いつごろ来ますか。」

佐藤「⑬来月のはじめごろは、どうですか。」

山田「⑭ええ、どうぞ来てください。」

⑩の「今度」は、研究所を訪ねる時期を不確定なある時に指定している。「行ってもいいですか」は、相手に許可を求める表現。⑪、それに⑭の「ええ」は、やや力が入っている。もう少し柔らかくてもいいだろう。⑫の「いつごろ」は「いつ」と期日をはっきり決めないで、だいたい時期をきいている、婉曲な言い方である。あいまいに聞くことによって、話し手がそれを

決定する権利を聞き手に委ねる一種の敬語行動である。実際の行動までもがこれによってあいまいになり、勝手な時に訪問するという無礼な結果になるわけではない。「いつごろ」とあいまいに聞かれたら、⑬のように「来月のはじめごろ」とこれまた婉曲に幅を持った期間を指定し、きき手にその決定権を投げ返す。この映画では描かれていないが、実際はこのあと、具体的に、何日、何時という約束が成立する。

⑬の「来月」は発話の行われた時点から見ての月。「翌月（よくげつ）」は、現在とは無関係に、ある時点の次の月。「来週」「来年」などと類をなす。

Ⅲ 駅前広場で (⑮～⑳)

佐藤が訪問しようとしている研究所は、油壺にあるという設定である。油壺は、神奈川県三浦半島南端の西側にあり、相模湾に面した入江となっていて、ヨット・ハーバーとしても有名である。電車で東京から油壺へ行くには、品川駅で京浜急行電鉄に乗り、岬口（みさきぐち）駅で降りる。あとは、バスを利用する。油壺の近くには、「城が島の雨」で知られた城が島がある。

佐藤が行こうとしている水産研究所は、実際は油壺にはない。映画撮影にあたっては、「魚の国」（油壺マリンパーク）内にある研究室をお借りした。「魚の国」は、魚のショーなども楽しめる水族館である。敷地内には熱帯植物が植えられ、南国の香りがする。水族館の向こうには太平洋が広がっている。

さて、岬口駅の改札口を抜けた佐藤は、バス乗り場の方へ向かって歩いていく。

Ⅲ-1 バス乗り場をきく (⑮～⑳)

佐藤は、油壺へ行くバス乗り場を、ちょうどそこにいあわせた人にきくことにする。

佐藤「⑮あの一、油壺へ行くバスは、どこでしょうか。」

吉川「⑯えーと、そのバスは、いま行ってしまいましたよ。」

⑰ほら、向こうへ行くバスです。」

吉川「⑱今度出るバスは、たしか、一時ですよ。」

佐藤「⑲四十分もありますね。」

佐藤「⑳困ったなー。」

⑮の「あー」は文頭にあって、相手の注意をひく働きを持つ。それに続く⑮の「油壺へ行くバス」は、連体修飾構造である。3.2.を参照。「～バスは、どこでしょうか」は、文字通りにはそのバスの所在を質問する形式であるが、実際には、「～バスの乗り場はどこか」ということを質問しているわけである。このような言語形式と実際の意味のずれが許容され、コミュニケーションが成立するには、つぎのような背景があると考えなければならない。ひとつには、駅前というバスの乗り場がたくさんある場面であるということと、さらに、そのような場面で「どどこへ行くバスはどこだ」と発話すれば、それはそのバスに乗るためであって、そのためには乗り場の位置こそが必要な情報として質問されていて、そのバスの存在する物理的な位置が質問されているのではないということである。言語外のコンテキストに支えられて、はじめて「～バスはどこだ」という質問が「乗り場はどこだ」という質問を意味しうると考えるわけである。

ただし、この場面では、そのバスがたまたま出発してしまったため、乗り場の位置を言うかわりに、⑯の「そのバスは行ってしまいました」という返事が発されることになってしまっている。⑮は、コミュニケーションが、言語形式の担う意味以外のさまざまなコンテキスト、場面などに支えられてはじめて成立するものであるということを示す好例である。

⑯の「えーと」は何かを思い出そうとしたり、しばらく考えたりする際の感動詞で、「エーッと」と「と」の前に促音が入るのがふつうである。「行ってしまいました」の「動詞＋てしまう」は、ある行為が行われ、それが完了し、その行為はもはや行われていないという事態の推移、完了を示す形式で、「終結態」などと呼ぶ説もある。映画解説12「そうじは してあります

か」を参照のこと。

⑰の「ほら」は、目前に見えるものに対して聞き手の注意を喚起したり、聞き手の視線を目的の事物に誘導する働きを持つ感動詞。指示詞が事物を指し示す働きを持つものに対して、「ほら」は聞き手に働きかける一種の刺激である点が特徴的である。聞き手の心理的な内面の世界にそのものを想起させ、聞き手をして、その事物に想い至らしめようとする働きも持つ。ドイツ語の“Siest du!” “Guck mal!”等はちょうどこれに当たろうか。「ほら」は目上の人に対しては使えない。かなり informal な表現である。「向こうへ行くバスです」は、連体修飾構造。3.2.を参照されたい。

⑰の文は、主語述語構文から見ると述語部分しかない。この文に主語を、例えば「油壺へ行くバスは」、あるいは「そのバスは」を入れてみると、日本文として、不自然なものになってしまう。一種の redundancy があると言えよう。したがって、いわゆる主語のない文が日本文として適格な文というわけである。主語—述語構造ではなく、thema-rhema、あるいは、topics-comment という構造からこの文を見る方が適当ではないかと考えられる。すなわち、⑰のテーマは、すでに⑱で提示されている「そのバスは」であり（さらにそれは⑮で「油壺へ行くバスは」として提示されている）、⑱のないしは⑮のテーマが、⑰の文にまで生きていて、⑰では、したがって、テーマを再度提示する必要はなく、ただ単にレーマだけを示せばよいことになるわけである。

聞き手の立場からすれば、⑰の文を受けとったとき、その文にはテーマ部分が欠けているわけであるから、文脈をさかのぼって、⑰のレーマ部分に適当なテーマを探すことになる。「そのバス」に即座に行きつくことは言うまでもない。このように見ると⑰のような文は、聞き手に対して、「文脈をさかのぼるか、あるいは、場面の状況から、発話で言及されている事物の持つ意味の情報などから、その文にもっとも適当な themaを探せ」という命令をも内蔵しているということもできよう。このような命令を認めるとして、それを文法規則としてどのように扱うかは、目下のところ確たる説明がつかない

いと言うほかはない。この後の場面にもいくつかこのテーマーレーマの図式で説明する方がよいと思われる会話が見られる。現在のところ、このテーマーレーマ、あるいはトピックスーコメントといった図式をもって、部分的にはともかく、文法現象全体を説明するまでには至っていない。

⑱も、S—P構造でみると意味をなさない文になる。[バス] subj. [一時] pred. という関係は、理論的にはあり得ない。ところが、実際に意味するところが「今度出るバスの出発時刻は一時だ」ということは、⑱の文を発する側も受けとる側も、また、これを見ている我々第三者も何の疑いもさしはさまず理解している。これも、⑰などと同様、S—P構造とは別の説明が必要である。すなわち、テーマとして提示された「今度出るバス」について、レーマとして述べられ得る情報は無限にある。その無限の可能性がどれかひとつにしぼられなければ、⑱の文は成立しない。少なくとも⑱の文をもってコミュニケーションは成立しない。テーマとして提示されたもののうちから、何が「そのバスについての発車時刻」がコメントされるべき目下のテーマであると決めさせるのかが、説明されなければならない。

⑱の文の発される背景には、a) その直前に乗るべきバスが出発してしまった、b) きき手はなお乗る必要があるらしい、c) したがって、目下必要とされる情報は次に出るバスに関することがらである、d) とりわけ、その発車時刻であろう、といった判断が話し手によってなされたと考えられる。これは、文脈ではない。事実関係についての一種のコンテクストとして話し手と聞き手の間に存在するものと考えられる。話し手は上記のような予測のもとに、「今度出るバスは」というばくぜんとした句を発して、「今度出るバスについて情報—レーマ、あるいは、コメント—を発するぞ」という信号を聞き手に発するわけである。この際、話し手は聞き手に対して、上記 a), b), c), d) のような事実関係について了解しているだろうという期待は持っているし、⑰に述べたと同じように、了解するように命令する機能を内蔵しているとも考えられる。そうしておいて、「一時ですよ」という情報を出すわけである。

聞き手の側からすれば、テーマを提示された段階では、どんな情報がコメントされるかは、実は不明であって、「一時ですよ」というコメントを受けてはじめて、テーマが時間に関するものであることから、上記の a), b), c), d), に思い至り、発車時刻についての言及であることが理解されるわけである。

もうひとつの説明に、「です」を代動詞とする考え方がある。すなわち、「一時に発車する」が基にあって、それにある種の変形操作を加えて得られる、いわば、本動詞の代動詞として「です」が用いられるとする考え方である。この考え方は、説明力が強い有力な理論だと考えられるが、「一時に発車する」が与えられて、その変形操作の結果として「一時です」が導き出されるという方向の説明だけである。聞き手の側は「一時です」しか与えられていないわけで、そこから変形操作を逆にさかのぼって「発車する」という実質の意味を持った動詞を探し当てるルールは示されていない。つまり理解のプロセスに対する説明力に難がある。

⑱の「たしか」は、話し手がものごとの判断をするとき、かなりの確信もっていることを示す文副詞。「たしかに」は話者の確信を示す副詞。

⑲には、「今から発車時刻（一時）まで」という時間を区切る副詞句が省かれている。この「も」は、強調の意を表す係助詞とされているもので、

〔1〕 雪が1メートルも積もった。

の「も」と同類とされている。

⑳は、ある状態について話し手が困った状態にあるという表現。何について「困った」かは、表現されていない。「次のバスの発車まで四十分もあること」らしいということは、状況から了解される。「困ったなー」と常体が用いられているのは、その場の聞き手（吉川）に対してでなく、独り言のように発されたからだと考えてよい。佐藤の顔の向きからもそれが分かる。なお、「困ります」と現在形を用いると、「相手、あるいは、第三者の行っている、ないし、行った、行おうとしている行為が話し手にとって不都合である」という表現であって、時として、聞き手に対する非難、拒絶の働きを持

つ。その相違点に留意する必要がある。

Ⅲ-2 同乗をすすめられて (㉔~㉗)

バスが行ってしまって困っている佐藤に、吉川は声をかけてくる。吉川は、いっしょに車で行こうと言う。

吉川「㉔油壺へ行くんですか。」

佐藤「㉔ええ。」

吉川「㉔私も、油壺へ行きます。」

㉔いま、友達が車で迎えに来ます。

㉔いっしょに乗っていきませんか。」

佐藤「㉔すみません。」

㉗じゃ、お願いします。」

㉔は「のです」を持った文。

㉔' 油壺へ行きますか。

㉔と㉔'を比べると、㉔'では「油壺へ行くか行かないか」が質問されるが、㉔では「(あなたが)油壺へ行くという私(話し手)の判断は正しいか」という質問である。「のです」「のですか」の例は、このほか、㉒、㉓、㉖、㉗、㉘にみられる。いずれも上のような解釈をもって見るべきものである。

㉔は、ややぶっきらぼうな反応。「ええ」は、目上の人には使いにくい。この場合、「はい」「はあ」などもあり得よう。㉔の「迎えに来る」の用法については、3.1. 参照。なお「迎えに来る(行く)」は、人について言う。物は、「とりに行く(来る)」である。ドイツ語の *abholen* は人、物両方に使える点で違いがある。

Ⅲ-3 迎えの車が来る (㉘~㉙)

ちょうどそのとき、吉川を迎える車がやってくる。吉川は、車を運転する人に様子を話してから、佐藤に車に乗るようにすすめる。

吉川「㉘ああ、来ました。」

㉘向こうから来る黒い車です。」

吉川「㉙さっ、どうぞ。」

佐藤「㉚すみません。」

㉘の「来ました」の主は、友達か車かはっきりとしない。実際に目に入るのは車であるから、㉘の動作主は車と考えてさしつかえあるまい。そして㉘で、いくつかやってくる車のうちから目的の車を選別する情報をコメントとして示したのである。㉘は連体修飾構文。3.2.参照。連体修飾文と同時に「黒い」という形容詞も連体修飾の位置に立っている点に注意。

㉙の「さっ」は相手の行動をうながす働きを持つ感動詞。「さっ」と末尾に促音を持つものと、「さあ」と短く下降調の音調で発されるものがある。「さあー」と長くのばして、相手の発話、質問に対して直接答えないか、あるいは否定的な反応をする場合もある。

佐藤は、運よく油壺へ行く人の車に同乗することができた。吉川は、車を運転する人に佐藤の事情をあらためて説明したりしただろうが、映画では、その辺の事情を深く描いていない。

IV 車の中で (㉚~㉜)

車は、油壺へと走っていく。ここで車内の佐藤と吉川の対話が描かれる。話題は、佐藤の行先、そして三浦半島の海、水産研究所の建物である。

IV-1 水産研究所へ行く (㉚~㉜)

吉川は、佐藤がどこへ行くのかと、声をかけてくる。

吉川「㉚こちらへは、初めて来たんですか。」

佐藤「㉛ええ、初めて来ました。」

吉川「㉜どちらへ行くんですか。」

佐藤「㉝水産研究所へ行きます。」

吉川「㉞そうですね。」

㉚の「こちら」は指示詞のひとつ。話し手の側の事物、方向を指す。ここ

では、ばくぜんと話し手の現在いる場所、すなわち、三浦半島先端の地域を指している。「初めて」は、for the first time, あるいは zum ersten Mal という意味で、「はじめに」は、at the beginning, at first, am Anfang, zuerst である。区別に注意。㉔の「どちら」は疑問指示詞。

㉕の「水産」は河川、湖、海などから生物資源を産出、生産すること、あるいは、生産された生物資源をいうが、一般に「水産」単独で用いられることは少なく、「水産物」「水産資源」のように複合語の構成要素となることが多い。海から産出されても、石油や、マンガン塊のようなものには「水産」という語は用いない。「水産研究所」は「水産」に関する「研究所」。「研究所」の名前の付け方は、研究内容、目的、性格などを表す語を前に付けて示すことが多い。例えば、

〔2〕 国立 国 語 研究所
性格 研究対象

「研究所」は、学問的な研究を進めるために作られた組織体である。大規模な研究を行うものとしては、国や都道府県の設立した公のもの、大きな私企業が自社の製品開発等のために設けたものなどがある。国が設立した研究所には、各大学に付置された研究所と、大学とは独立した研究所とのふたつのタイプがある。大学に付置されたものでは、学生の教育も同時に行われているところが少なくないが、大学と独立した研究所では一般に学生の教育は行われていない。ちなみに、国立国語研究所は、後者の類に入る。「研究所」を単純に institute, Institut と訳すと、国状によってそれぞれ機能が異なり、誤解を生む原因となる。その機能の対比も同時に行って説明することが必要な場合があろう。

IV-2 海が見える (㉗~㉘)

やがて車の行く手に海が見えてくる。

吉川「㉗もうすぐ、右側に海が見えてきますよ。」

佐藤「㉘あっ、見えてきましたね。」

㉗の「もうすぐ」は、現在の時点から見て近い未来にものごとが生じるで

あろうと予測するとき、その時点を指示する時の副詞。時間的な deixis を持つ形式。現在から見てどのくらいあとまでを言及することができるかは、そのできごとの性質とそれがらに対する話し手の主観的関わり方によって異なる。これに対して、「いますぐ」は現在ただちにという意味であって、現在からそのできごとが生じるまでの間隔が小さい。

㊸の「見えてきます」については、3.1.を参照。「見える」は、自発動詞とも言うべきもので、人がある事物を見るとき、その目に入ってくる事物が主格に立ち、見る動作主が「に」格を以って示される。「聞こえる」も同じ。㊹の「右側」は、道路、車、客車等、話し手のいる位置から見て両側に平行な線を引いたかのように、区別できる側面がある場合の右の側面を示す。単に「右に」「右の方に」と言った場合は方向のみを表し、側面の意味はない。この場合では、車の両側が話し手にとって「側面」を形成しているため、「右側」という表現になったと考えられる。

ここで車内のラジオから聞こえてくるのであろうか、歌謡曲の一節が流れてくる。前奏は、低く㊺㊻のあたりから始まっていた。「はるかな波が／きらきら光る海岸通り／短かい旅よ……」と聞きとれる。これは、「プレイバック Part 2」という歌謡曲の一節である。「緑の中を通り抜けていく／真赤なポルシェ」(注:「ポルシェ」は、西ドイツ製のスポーツカー)という歌詞から始まるこの歌は、山口百恵が歌い、昭和53年にヒットした。上にあげた歌詞は、二つとも動詞による連体修飾の構造になっている。また後者の「を通り抜けていく」は、「____ていく」の例である。

IV-3 研究所の建物(㊼~㊽)

海をへだてて向こう側に白い建物が見える。それが水産研究所である。

吉川「㊼あそこに見える建物が研究所です。」

佐藤「㊽あの白い建物ですね。」

吉川「㊼ええ。」

㊼の「建物」は、人が住むか、中で作業ができる程度以上に雨風を防ぐこと

のできるもので、人がその目的のためにさまざまな材料を用いて作りあげたものを指す。電柱、テレビ塔などは、この範ちゅうに入らない。また、木の枝や草などで作った臨時のものや、テントなども「建物」とは言わない。英語の building, ドイツ語の Gebäude 等との細部にわたる比較も興味あるところである。④の「建物」には、「あの」と「白い」とのふたつが連体修飾の位置に立っている。この両者の順序は逆でもよい。英語、ドイツ語の場合は、

[3] that white building

[4] das weiße Gebäude

という順だけが可能で、

[3]' *white that building

[4]' *weiße das Gebäude

(*はその文(句)が不可能なことを示す)

のような順はありえない点、注目に値する。

④の文も、すでにふれたいくつかの文同様、テーマレーマの構造をなしていると考えられるが、テーマの部分は言語的に示されていない。コンテキストにしたがえば、この文のテーマは③で示された。「建物」か「研究所」か、決めがたい。両者は、「 N_1 が N_2 です」とコプラで結ばれたS-P構造をなしているから、どちらでもいいとも言える。すなわち、③をうけて、

③ あそこに見える白い建物が研究所です。

$$\begin{array}{ccc} & N_1 & N_2 \end{array}$$

④' $\left\{ \begin{array}{l} \text{(その) 建物は} \\ \text{(その) 研究所は} \end{array} \right\}$ あの白い建物ですね。

というテーマが仮定される文と言える。④は実際には、③の文の念おし、確認の働きを持っている。④'で仮定される{ }の部分のテーマは、しかし、言語化されると日本文として不自然な文となる。

V 研究所で (④②~④⑧)

多分、車で研究所まで送ってもらった佐藤は、山田の研究室の入口まで来る。

V-1 研究室の入口で (42~49)

佐藤は、山田の研究室に居あわせた女性に山田は在室かどうか、たずねる。

佐藤「42すみません。」

岡田「43はい。」

佐藤「44山田さんは、いらっしゃいますか。」

岡田「45山田さんは、いま、お昼ごはんを食べに行っています。

46すぐ帰ってきます。」

佐藤「47そうですか。」

岡田「48どうぞ、こちらへ。」

佐藤「49はい。」

山田の研究室にいる岡田という女性のこの研究所での地位は、この会話だけからは不明である。42の「すみません」は、聞き手である岡田の注意をこちらへ向けさせるのが直接的な目的の発話である。ドイツ語で、Entschuldigung!, Verzeihung! などと言って、謝罪の表現を用いて相手に話しかけて質問を始めるのと同じである。

43の「はい」は、相手が何か(42「すみません」)を言ったとき、それに対して反応した、あるいは、反応する用意があるということを相手に示す信号である。「ええ」とはならない。この機能と可否の表明ではないという点で類似するものに「あいづち」の「はい」があるが、「あいづち」は「ええ」となりうる点でこの「はい」とは相違する。「あいづち」について付言すれば、日本人が英語を用いる場合、「yes」を多用しすぎるといわれる。その原因は、このあいづちの「はい」を単純に“yes”に置き換えるところにあると考えられる。英語話者は、そもそも日本語話者ほどあいづちを打たないらしく、ましてそれをいちいち“yes”と言っては、英語として奇異に聞こえることになるのであろう。ところが、同じヨーロッパ語のゲルマン語族であっても、ドイツ語では“ja”が可否の意志表示だけでなく、あいづちの機能をもって多用されているように観察される。音の形は方言的なもの

であるが、西南ドイツの町 Mannheim などでは [ʔ a jo:] といった長い発音の「ヨーオォッ」が会話の途中に盛んに挿入され、まさに「あいづち」そのものの機能を果たしている。これは英語の“yes”の持つ分布とはずいぶん異なっているように思われ、日本語の「はい」の持っている機能、あるいは、分布との比較において興味ある問題である。

④の「いらっしゃる」は、「行く」「来る」「いる」に対応する尊敬語。この場合は、「いる」に対応している。「いらっしゃる」がこれらのどれに当たるかは、コンテキスト、発話の状況によって判断される。

⑤の「食べに行く」については、3.1. 参照。「いま」は、発話が行われた時点ですらという最も基本的な意味で用いられている。「行っている」は「行く」という動作が行われ、現在それが完了した結果の状態にあるという意味である。したがって、その行為者は、目下発話の場所にはいないことになる。「お昼ごはんを食べる」という表現は、やや、informal なひびきを持つ。「食事に行っています」といった「食事」の方がやや改まった感じを与えよう。「食べる」の目的語は、具体的な食物のほか、「昼ごはん」「晩ごはん」といったやや抽象的なものまでも可能であるが、いずれも、ものそのものである。

「食事を食べる」は言えない。「食事」が食べものそのものではなく、「食べること」といった動作名詞の性格を帯びているからであろう。to eat the meal, das Mittagessen essen といった「食事を食べる」式の結合と対比されるべきであろう。

⑥の「すぐ」は、④の「すぐ」参照。「帰ってくる」の「くる」については、3.1. 参照。

⑧の「こちら」は、②の「こちら」と同じ。⑨の「はい」は、③と同じ相手のすすめに対して承知したことを示すもの。「はい」に続けて、「ありがとうございます」、あるいは、「おじゃまします」などと言うのがていねいであろう。

V-2 山田が戻ってくる (50~51)

そうこうするうちに、昼食を終えた山田は、自分の研究室へと歩きながら帰ってくる。

岡田「⑤① あっ、帰ってきましたよ。」

⑤② ほら、向こうから歩いてきます。」

岡田が窓越しにこちらに向かって歩いてくる山田を示して、山田が帰ってきたことを佐藤に告げる。⑤③の「帰ってくる」については、3.1. 参照。

⑤④の「ほら」は、⑤⑤の「ほら」と同じ。「向こう」は、⑤⑥ですでに出た。「歩いてくる」については、3.1. 参照。

V-3 山田と会う (52~53)

山田が部屋に入ってくると、岡田は佐藤の来訪を告げる。そして山田と佐藤は、あいさつを交す。

岡田「⑤⑦ お客さんですよ。」

山田「⑤⑧ そうですか。」

⑤⑨ ありがとう。」

⑤⑩ やあ、よく来ましたね。」

佐藤「⑤⑪ こんにちは。」

山田「⑤⑫ こんにちは。」

⑤⑬ さっ、どうぞ。」

⑤⑭の「です」は、「来ている」という意味。「来ている」の変形とみなすかどうか、説の分かれるところであろう。

⑤⑮の「やあ」は、人が出会ったとき、特に、それが日常のことではなく、多少とも特別な期待の持たれる出会い、あるいは、思いがけない出会いであったときに発される感動詞。男性のことばであり、また目上の人に対しては用にくい。ごく親しい友人の間では「よお」、また短く「よっ」となることもある。「よく」は、「来ました」ということが話し手にとって好ましいことであるということを示す副詞。

㉞の「こんにちは」は、昼間、人に会った時に発するあいさつ表現で、語形の変種はない。この「こんにちは」は、good afternoon!, guten Tag!, bon jour等に簡単に置き換えると、いくつかの不都合な点がでてくるので注意が必要である。「こんにちは」は、勤務先、学校などで毎日、あるいは週に何日か決まって出会う間柄では言いにくい。それに対して、good afternoon! (これが、たとえば米国でふだんに用いられるかどうかは別として)、guten Tag!等は、毎日顔を合わす職場の仲間に対して毎日あきずに用いられる。この感覚をそのまま「こんにちは」に乗せて、毎日「こんにちは」を連発すれば、日本語として全く奇異な言語行動であると言わざるを得ない。留学生などが教室や廊下で、先生に向かって「こんにちは」というあいさつをしている場面がまま見受けられるが、上記の点留意して指導する必要がある。

㉟の「さっ」は、㉞参照。「どうぞ」も同じく、相手の行動をうながす働きを持つ副詞で、状況によっては、相手の行動を請願したり、行動の許可を与える働きをすることもある。「どうぞ」の後に「_____て下さい」「_____下さい」等の形を伴う。この場面では、手ぶりでいすにかけるよう要請している。英語の please、ドイツ語の bitte に近いものであるが、bitte の場合、これを付加するかどうかでていねいさの上でかなりの違いが生じるようで、そのちがいは「どうぞ」の場合より大きいようである。また、please!,あるいは、bitte! には、コンテキストによっては、相手の行動を negative に要請する働き、すなわち、「そんなことはしないでくれ」といった意味になる場合があるが、「どうぞ」単独にはそのような働きはない。

V-4 飲物を買ってくる (㉞~㉟)

岡田は、何か飲物を買ってこようと、山田に言う。

岡田「㉞何か飲物を買ってきましょうか。」

山田「㉟じゃ、お願いします。」

女性である岡田が客を迎えた山田に対して、飲物を買ってくるという労働を申し出るということは、学習者の出身国によっては奇異なこと、あるいは、

ありうべからざることと映る場合もあろう。日本のいわゆる「研究所」にも多くの女性が assistant として働いているが、彼女たちは研究上の assistant としての仕事だけでなく、日常の private なことについても研究員の世話をすることが少なくない。もちろん、ある程度以上の世話はしないが、来客に茶を出す程度の世話をするのは普通のことである。したがって、ここに至って、岡田は山田の assistant であろうと推測されるわけである。

㉟の「何か」は、語構成としては疑問の代名詞「なに」と疑問の終助詞「か」から成り立っている連語であるが、「何かが」「何かを」「何かに」などのようにさまざまな助詞に従えることができ、構文論上は代名詞として機能し、不定なものを指定する働きを持つ。「何」のように相手に反応を要求する疑問詞としての機能は持たない。英語の something, ドイツ語の etwas, irgendetwas などにおおむね当たると考えられるが、構文論的にいくつかの違いが見られる。

「何か」は

㉟' 何か(を)買ってきませんか。

のように、単独で文中の構文論上の役割を果たすことができる。助詞の「を」は、この場合任意要素としてよい。㉟'の場合、「買ってくる」という動作の対象は特定されず何でもよい。一方、

㉟'' 飲物を買ってきませんか。

とすると、「買ってくる」ものは「飲物」と指定されて、それ以外のものではない。さらに、「何か」は、

㉟ 何か飲物を買ってきませんか。

のように、もうひとつの成分と共同して文中の成分となることができる。

「何か」と「飲物を」とは、順序を逆にすることもできる。この場合の「何か」と「飲物」との構文論的な関係は、いちがいに決めがたい。意味的にも「何か」として「買ってくる」という動作の対象物を一度特定せず、不定物として示し、そのあと、再度、「飲物」として不定物のなかから限定しなすと考えるか、「飲物」と対象物を指定しながら、その「飲物」の外延を「何

か」をもって、「ジュース」とか「コーラ」とかと、特定はしないがそのうちある一つに限定するのか決めがたい。また、上記のふたつの違いがあるとして、それが「何か飲物を」と「飲物を何か」という語順と関連があるのかについてもさらに検討を要する。㉟'、㉟''に示すとおり、「何か」は分布の上からは「飲物」との間に依存関係はなく、構文論上は一応同格と見ておく。なお、「何か」と「飲物」とが共起した場合、格関係を標示する助詞は「飲物」の方に付く点特徴的である。

「飲物」の位置にはさまざまなものが入り得るが、いずれも名詞、ないしは、名詞的機能を持ったものが適当で、「何か」を形容詞、動詞等で連体修飾するかたちは適格な日本語として受け入れにくい。

㉟'''— a. 彼は私に解らない何かを持っている。

— b. 美しい何かが見つかるかもしれない。

という文は、言えなくはないが何か落着かない感じがする。いずれも、「私に解らないものを何か」、「何か私に解らないもの」、「美しいものが何か」、「何か美しいもの」の方が適格な組みあわせとは言えないだろうか。

「何か」の同類に属する形として、「誰か」「いつか」「どこか」「どれか」などがある。それぞれ不定なものなから、ひとつを指定する働きを持つ点では、「何か」と共通するが、「何か」がものやことがらを指定するのに対して、これらは、人、時間、場所等を指定する点でそれぞれ用法に相違が見られる。なお、「なぜか」は、「なぜ」が副詞であるからか、副詞的性格が強い。

V—5 手みやげ、あるいは頼まれて持ってきた品物を渡す (㉟～㉟)

ここで佐藤は何か包みを山田に渡す。

佐藤「㉟あ、これを持って来ました。」

山田「㉟ありがとう。」

㉟で発される「あ」という感嘆詞は、「あ」以下で言及することがらをつい忘れていて、いま思い出したといった風な印象を与える。日本の習慣と

して、あらたまって他人を訪問する際、何か「手みやげ」を持参するのが通例と言えよう。もちろん、すべての場合に必要というわけではないが、とりわけ、目上の場合、何かを持参するのがふつうである。この映画の登場人物の関係から考えて、手みやげを持参することはごく自然のことであり、また、あいさつが終った直後、いすをすすめられたときあたりがその品物を渡す機会としては適当である。したがって、「これ」で指示される紙ぶくろに入ったものは、手みやげである可能性は高い。ところが、そう考えると、「あっ」と言って、「あっ、忘れていた」などといった態度をとるのは、やや不可解である。また、そういう手みやげは、風呂敷などに包んで持参し、相手の家で風呂敷をほどこき、中身だけ相手に渡すのがふつうの方法であろう。その際、包装まではほどこかない。この映画のようにデパートの紙ぶくろのようなものは風呂敷に相当し、差し出すときはふくろから取り出し、中身だけを渡すものであろう。したがって、この佐藤の言動は「手みやげ」を差し出す動作としては、やや自然な流れに逆らう。ここでは、山田から頼まれていた何かを持ってきて、山田に手渡すといった行動と解釈した方がよいのかも知れない。

㉔の「ありがとう」も、㉓の解釈と並行するが、もしみやげをもらったのだとしたら、山田のこの反応はいささか淡泊すぎる。この場面で授受されたものは、みやげではなかったと考えよう。なお、「持ってくる」については、3.1.参照。

V-6 波の音 (㉔~㉕)

海のそばにある研究所のこととて、波の音が耳に入ってくる。

佐藤「㉔ここは、静かですね。

㉕波の音がここまで聞こえてきますね。」

山田「㉕ええ、今日は、いつもよりよく聞こえます。」

㉔の文も、S-P構造ではない。「ここは」は、場所格であって主格ではない。やはり、テーマーレーマ構造として見るべきであろう。

④の「聞こえる」は、③の「見える」と同様、自発動詞とでも言うべきもので、耳に入ってくるものを主格に置き、動作主——聞く人——を「に」格に置いて表す。「聞こえてくる」の「てくる」については、3.1.を参照。

④の「波」は水面の振動する上下の運動であるが、池、水泳プール程度より大きな開水面について言い、バケツやたらいの中の水面の振動は、特別に比喩的に言う場合以外は、「波」とはいわない。「音」は、「波」とちがって、同じ振動であっても耳に達して聴覚神経がとらえた物体の振動である。「声」は、そのうち人間の声帯から発される音。時として、動物の発する音も比喩的に「声」ということもある。「虫の声」、「なき声」。「音」は、そのきこえのいかにかわらず「音」であって、英語の sound, noise, crash, あるいはドイツ語の Laut, Geräusch, Ton, Schall, Klang, Krach, などのように、音の性質、きこえによって分けることはしない。このような区別をするには、「おと、オン」を用いた複合語を用いる。なお、Schallは「ひびき」が適当かもしれない。④の「ここまで」は、「聞こえてくる」という継続的な動作、作用の到達点を示す句。

⑤の「いつも」は、品詞の認定がむずかしい。一般には副詞とされているが、「いつもの場所」のように「の」で連体格に立ち、名詞的な性格も持つ。「いつでも」は、同じ副詞でも「の」には続かない。しかし「いつも」は「を」「が」「に」等の助詞とは接続せず、名詞的の性格も限られている。ここでは「いつもより」と「より」に続き名詞的な性格を示している。⑤の文は、「聞こえる」の主格である「波の音」が示されていない。⑥では、④との連続で見たとき、「波の音」をくりかえしては適格な日本語とはならない。

V-7 えびの研究 (⑥~⑦)

話題は、山田の研究にと移る。これは、佐藤の一番の関心事のようである。

佐藤「⑥山田さんは、いま、何の研究をしているんですか。」

山田「⑦えびの研究をしています。」

佐藤「⑥⑧山田さんは、ずっとえびの研究をしているんですね。」

山田「⑥⑨ええ、学生のころからえびの研究をしました。」

⑦⑩いまは、えびとプランクトンの関係を研究しています。」

⑥の「研究」は、ある問題について学問的な検討を加え、結論を導き出す行為の総体、あるいは、結論を導き出そうと検討を加える行為。ただし、学問的かどうかは必要条件であって十分条件ではない。また、上記行為の一部のみを指して「研究」と言うことはない。たとえば、「えびの研究」のためにある日の午後水槽の水をとりかえるとか、水温の変化を記録するとかといった部分だけを「研究」と言うことはない。「勉強」は、「研究」とはちがって、知識を吸収し、その人の能力を養う行為のみを指す。英語話者の中に、「研究」と「勉強」とを混同するものが見られる。study にこの両方の意味があることから来る一種の interference の例であろう。また、ドイツ語の Arbeit には、さらに「仕事」という意味が加わり同様の混同がおこるようである。留意すべきであろう。

⑦の「えび」には、生物学的分類に従っていくつかの下位区分がされるが、語形としてはいずれも「えび」という形態を含む複合語である。たとえば、「いせえび」「くるまえび」「たいしょうえび」「しばえび」等。「えび」は、これらを総称した上位概念を示す語である。フランス語のように、langouste, homard, langoustine, crevette と単独の語をもって種類の区別をし、総称を持たない言語との相違が見られる点興味を持たれる。

⑧の「ずっと」は、ある動作や状態、属性などが、時間的、空間的に、連続して続いている様子を表す副詞である。属性についてはその程度がさらに高まることを示す。

⑧' あのテレビよりこれの方がずっと安い。

は、安いという属性の程度が高まっている。そのことがらの継続について、その始まりと終りとをとくに示す必要はない。

⑨の「ころ」は一般には、単独では用いられない付属形態素である。⑨の例のように「名詞+の」が伴うか、「もう向こうへ付いているころです」の

ように連体修飾文を伴うかして用いられ、何かものごとが行われたり、ある状態が生じる時点を漠然と示す働きを持つ。映画解説10「もみじがとてもきれいでした」(P.34~P.35)を参照のこと。「してきました」については

3.1. 参照。

⑩の「プランクトン」は外来語。ギリシャ語を語源とする plankton のこと。「関係」は、ふたつ以上のもののあいだのつながり。⑩で言えば、「えび」と「プランクトン」とのあいだにみられる何らかのつながりをいう。

V-8 ジュースとデーター (⑩~⑮)

岡田がジュースを買ってくる。その岡田に、山田はデーターを持ってきてくれるよう頼む。

岡田「⑩ジュースを買ってきました。」

山田「⑪ありがとう。」

山田「⑫どうぞ。」

山田「⑬あっ、すみませんが、僕の机の上からあのデーターを持ってきて下さい。」

岡田「⑭はい。」

⑩で、客の前で「買って来た」という発言をするのは、日本語の言語行動としてはいささか難がある。客からすれば、自分のために「買う」という負担を主人側にかけてことが言語的に言明されることにより、恐縮してしまう。客を恐縮させる言動をわざわざ発するのは、もてなす側としてつつしむべきことである。ここでは、「どうぞ」とか何とか言って出すところである。

⑬の「データー」は英語の data から来た外来語。表記は「データ」もある。なお「買ってくる」については、3.1. 参照。

V-9 図鑑をみながら (⑯~⑳)

図鑑のようなものを見せながら山田が佐藤に示しているのは、多分プランクトンの写真だと思われる。

山田「⑭はつ、きれいでしょ。」

⑰「こんなのも、あるんですよ。」

岡田「⑱はい。」

⑰の「きれい(だ)」は、色彩、形状などが見る人の美的感覚に訴えて見る人をこころよい感動の状態にするようなものの性状という意味と、やや異なっていて、清潔で汚れのない状態という意味のふたつがある。この場合は前者。「でしょう」は、この場合、話し手が下す判断について聞き手の同意を求える表現。なお、「きれいです」の主語は示されていないが、画面からは、プランクトンやえびが見え、発話の状況、あるいは場面に提示されているため、言語的に発する必要がなかったものと考えられる。

⑰の「こんな」の「の」はコンテキスト、あるいは、発話の状況から与えられている事物を代名する形式名詞。この場面では、⑰の主語として言及されるべきだった話題のものを指している。

岡田がピンク色のファイルを持ってきて、山田に渡すときの「はい」が⑱に発される。この「はい」は、相手の注意を喚起し、事物を提示する際用いられるもので、今までの映画にも既出している。前出の①、あるいは、④などとは異なったものであり、「はい、どうぞ」と後に続ける方がいていいのである。

V-10 えびとプランクトンの関係 (⑲～㉓)

山田はデーターの中のグラフを示しながら、えびとプランクトンの関係を説明する。

山田「⑲このグラフは、青い線がプランクトン、赤い線がえびです。

⑳このように、プランクトンが増えていきます。

㉑そうすると、えびは、減っていきます。

㉒しかし、プランクトンが減ってきます。

㉓そうすると、えびは、しだいに増えてきます。」

⑲の文は、S-P構造だけでは解釈が難しい。また「このグラフ」をテー

マとして置き、以トをレーマとする図式だけでも容易でない。「このグラフについて言えば」とテーマを提示したとき、「青い線がプランクトンです」がレーマとして提示された分となるわけだが、その部分についてS—P構造つまり、「青い線」をSとして「プランクトン」がPとなって「です」がこの両者をコプラとして結びつけていると考えることはできない。この「です」の部分は、少なくとも意味的には「を示している」といったものの代動詞と考えなければならない。聞き手が「です」を「を示している」である、あるいは、であろうと推定する手順、根拠は何であろうか。テーマで提示された「グラフ」という語から「グラフというものは、線などの図形をもって何かを『示す』ものである」という情報がたくわえられ、あるいは imply され、その情報、あるいは implication により「青い線がプランクトンです」という形が聞き手に与えられたとき、聞き手をして『青い線』はグラフであり、『青い線』は何かを『示す』はずであり、その何かは与えられた形式から『プランクトン』であるらしい、したがってこの場合の『です』は『示す』の代動詞であって、『青い線』と『プランクトン』とを結ぶコプラではないらしい。」という文理解に至らしめると考えられる。他方、話し手の方は、聞き手が上のように文理解をするであろうと、予測して代動詞をもって簡略な文を発するのであると考えることができる。一般化するならば、テーマで示された語句は、単にテーマとして提示されるだけでなく、レーマで示される事物の関係に対して必要な情報を供給し、聞き手にとっては文の理解を助ける働きをし、話し手にとっては、レーマの構文論的構造の持つさまざまな欠陥を補う役割を果たしているといえることができる。

㉗から㉘までの「___ていく」「___てくる」については、3.1.を参照。ただ、ここで現れる「___ていく」「___てくる」は、話し手のいわば主観によるものであって、どちらが用いられても自然な文ができる。線の方向を指でたどって、そのグラフの向きをどの点に立って、話し手が「心理的」に見ているかによるのであるから、このいくつかの文の場合は、「___ていく」「___てくる」どちらでもよいと言えよう。

㉑の「そうすると」は、前の文を条件として仮定すると、後の文で述べることがらが生じるという「条件」を示す表現。形の上では文であるが、ほとんど、接続詞のように用いられる。「そうすると」を省いて、

㉒ プランクトンが増えていくと、えびは減っていきます。
のように一文で条件と帰結とを示すことも可能である。

㉓の「しかし」は、前の発言内容と後の発言内容とが並行関係になく、相対立するものであるとき、あいだをつなぐ接続詞。㉔の「しだいに」は、副詞。ものごとの性質や状態が時間の進行に比例して、その度合いを増す様子を表す。なお、このグラフの示す生物学的な問題については、根拠があるということである。

V-11 えびの研究をめぐる(㉕～㉗)

山田の説明をきいた佐藤は、感想を述べる。

佐藤「㉕おもしろい研究ですね。

㉖これからも、えびの研究をしていくんですか。」

山田「㉗ええ、続けていきます。」

㉕の「おもしろい」はいくつかの意味があり、状況によってさまざまに用いられる。この場合は、「興味のある」という意味。㉖の「していく」については、3.1.参照。話し手は現在の時点に立って、山田の研究の将来にわたる進展を見ている。㉗の「これから」と「いまから」とは、いささか異なる。

「も」が付かないとほぼ同じであるが、「いまから」には「も」は付かない。㉗の「ええ」は、発話にやや力が入りすぎている。もう少し淡泊に言うものであろう。㉗の「続けていく」についても、3.1.参照。

V-12 海を見に行く(㉘～㉚)

話題は大きく変わる。山田は、海を見に行こうと佐藤を誘う。ひとしきり、研究の話をした後の休憩であり、また研究所の近くを案内しようという気持がある。

山田「㉞ちょっと海を見に行きませんか。」

佐藤「㉟ええ。」

㉞の「ちょっと」は、少しのあいだという意味ではない。海を見に行くことは、大変なことではない。すぐそこだから、「ちょっと」行こう、という意味である。

VI 波打際で (㉟～㊱)

山田と佐藤の二人は研究所を出て、海の波が押しよせてくるところまで降りてくる。午後の三時か、四時になって、波の勢いは強くなっている。ところで、波打際というのは、砂浜に波が打ち寄せるところを言うのであって、この場面の ように磯に波が砕けるところは、波打際とは言わないと思われる。では、何と言うかとなると困るところだが、徹視的に見るとやはり波打際ということになるうか。

佐藤「㊱おや、波が出てきましたね。」

山田「㊲午後は、いつも波が出てくるんですよ。」

㊱の「おや」は、ある事態・事柄にふと気付いて思わず口にするひとり言的表現。「波が出る」は、静かな海面に波が現れてくること。季節、時間によっていろいろである。㊱の佐藤のことばに、山田は、㊲でふだんの経験からの注釈を加える。「出てくる」については、3.1.を参照のこと。

波の出てきた海をみつめる二人の光景で、この映画は終わるが、二人の水産に関する研究の話はこの後、研究所に戻ってから続くことであろう。

3. この映画の学習項目の整理と練習問題

3.1. 「行く」「来る」について

「行く」「来る」については、この基礎篇の今までの映画の中でも扱われている。参考のためにあげると、次のようである。

(i) 「行く」

a. 本動詞としての「行く」(五課—13, 八課—3, 九課—7, 十一課—13, 14, 29, 十三課—19, 21, 46)

a'. 「目的語+に+行く」(十課—1, 十一課—12, 十三課—18, 20)

b. 「___ていく」(例なし)

(ii) 「来る」

a. 本動詞としての「来る」(五課—15, 16, 45, 十一課—17, 18, 十二課—4, 15, 16, 17, 18, 51, 59)

a'. 「目的語+に+来る」(十課—4)

b. 「___てくる」(十一課—29, 43, 45, 十二課—24)

すでに2.2.で触れた通りこの基礎篇の流れの中で考えれば、(1)のa, a', および(2)のa, a'の学習の上に、ここで(1)(2)のbの学習が展開していくことになる。既出の「___てくる」は次のような例である。

[5] ちょっと、たばこ屋へ行ってきます。(十一課—29)

[6] すぐ帰ってきますよ。(十一課—43)

[7] じゃあ、鳥井さんと呼んできます。(十一課—45)

[8] 私、洗ってきます。(十二課—24)

「___ていく/くる」の意味・用法がこの映画では、中心的な学習項目とはなっているが、上記(1)のa, a', (2)のa, a'の学習もその前提となる学習として組み込まれている。この映画は、独立した補助教材として利用されることの方が一般的であろうから、その学習をここで取り上げることは必要であろうし、また基礎篇の流れの中では復習、整理の部分に当たる。

「行く」「来る」については、今までも必要に応じ適宜、解説を加えてきたが、ここでは「行く」「来る」をやや詳しく論じることにする。

「行く」「来る」は、いずれも「動作主がある地点を出発し、他のある地点へ到着する目的をもって移動する」という意味を共通して持つ動詞である。移動動詞と呼ぶことができよう。意味特徴として大切な点は、ある地点へ到着しようとする目的を持っているということで、同じような移動を示す動詞、「うろつく」「さまよう」などとはその点で区別され、「走る」「歩く」

「飛ぶ」などとも異なっている。

目的を持っているかどうかは、話し手がそう判断しているということであって、動作主が実際どこを目標地点にしているかは問題ではない。また、その地点へ到着するかどうか話し手の判断にかかわることで、「そのままの移動行為を続ければ、ある地点へ到着するだろう、その地点を到着とみなす」と話し手が認定すれば、その地点が到着地点である。

出発点と到着目標地点とは言語的に明示する必要はない。つまり、義務的 (obligatory) ではない。文脈上必要な場合は、出発点は助詞「から」、到着点は「へ」「に」「まで」などで示される。主格や目的格の助詞とちがってこれらの句を示した場合、助詞を省略することはできない。

移動の手段は意味特徴の中に含まれず、中立である。また、義務的でもない。手段を示したいときは、

〔9〕 電車で (バスで、自転車で) 行く。

〔10〕 歩いて (車に乗って、走って) 来る。

のように、「名詞+で」、あるいは「動詞+て」の形で示す。ドイツ語のgehen 対 fahren のような対立を示さない点特徴的と言えよう。

移動の行為が行われている目下の場所を示すには、「名詞+を」(いわゆる、place of transit の「を」) が用いられる。

〔11〕 この道をまっすぐ行くと学校があります。

この「道」は経過場所を示し、到着点を示していない。

3.1.1. 「行く」と「来る」とを弁別するパラメータ

動作主の移動という点では共通した意味素性を持つ「行く」と「来る」を弁別するパラメータは、「動作主の到着点に対する話し手の立場、あるいは関わり方」だけであると考えられる。言いかえれば、話し手がどこに立ってその移動行為を見ているかという、話し手の「位置」が唯一のパラメータと考えられる。すなわち、

(i) 「来る」は、話し手が、動作主の移動行為をその到着地点に立って見ていることを示し、

(ii) 「行く」は話し手が、動作主の移動行為をその到着地点以外に立って見ていることを示している。

とすることができる。話し手の立っている位置が原点となって、外界、あるいは外界の現象を認識し把握しているという点で、指示詞などの持つ deixis と似通った点があると言えよう。指示詞の deixis と異なる点は、指示詞においては、話し手が現に居る場所が常に deixis の原点であるのに対して、「行く」「来る」を弁別するパラメータとしての話し手の位置は、現実の位置とは遊離して、話し手が意識の中でその「位置」を変えることができ、物理的な位置とは無関係な位置に仮に立ったとして、動作主の行為を見ることができるという点である。意識の中での deixis とでも呼ぼうか。

この映画で提示されている「来る」「行く」について、話し手の位置という観点からみてみよう。なお、日本語の慣用上、「行く」「来る」の順で見出し等を示すが、意味の分析の便宜上、「来る」を先に示す。

3.1.1.1. 「来る」について

a. 話し手は現実には到着地点、あるいは到着予想地点に立って、動作主の移動行為を見ている場合。その場合、実際の行為は、動作主は話し手の方へ向かって近づいているか、近づいていると話し手がみなしているという状況にある。

- ㉔ いま、友達が車で迎えにきます。
- ㉘ ああ、来ました。
- ㉙ 向こうから来る黒い車です。
- ㉚ こちらへは、初めて来たんですか。
- ㉛ ええ、初めて来ました。
- ㉞ すぐ帰ってきます。
- ㉟ あっ、帰ってきましたよ。
- ㊱ ほら、向こうから歩いてきます。
- ㊲ やあ、よく来ましたね。

- ⑤⑨ 何か飲物を買ってきませんか。
- ⑥① あっ、これを持ってきました。
- ⑥④ 波の音がここまで聞こえてきますね。
- ⑦① ジュースを買ってきました。
- ⑦④ あっ、すみませんが、僕の机の上からあのデータを持ってきてください。

b. 話し手の現実に立っている位置は、動作主の到着点ではなく、話し手は意識の上でだけ、到着点に移り、その地点に立ったものとして、動作主の移動行為を見ている場合。

- ② 佐藤さん、談話室へ来ませんか。
- ③ いま、山田さんが来ているんです。
- ⑫ いつごろ来ますか。
- ⑭ ええ、どうぞ来てください。

②の場合、話し手の井上の現実に立っている位置は、佐藤の部屋の入口であって、動作主佐藤の到着地点である談話室ではない。話し手は、意識の上ですでに談話室にいて、そこに立っているという想定のもとに動作主佐藤を誘ったのである。話し手は、意識の上では動作主の到着を談話室で待っていると考えられる。現実の行動としては、したがって、話し手井上は、談話室から佐藤を迎えにきたと想像される。ここで、

- ②' 佐藤さん、談話室へ行きませんか。

であつたら、話し手は、現実にも、意識の上でも談話室にはいないわけであるから、話し手は、談話室以外の場所から談話室へ行く途中に、佐藤を誘いに立ち寄ったのであろう、と理解されるわけである。

③の場合、話し手の井上は、②と同じく聞き手の佐藤のところにいる。動作主の移動行為の到着点は談話室であつて、話し手の意識の上での位置は、②と同じく談話室にあるということになる。

⑫、⑭とも話し手の山田は、現在談話室にいて、動作主佐藤の移動行為を「来る」と表現しているのである。したがって、話し手は、意識の中では動作

主の到着点である「研究所」において佐藤の移動行為を見ているということになる。話し手は、動作主佐藤の到着を意識の上で迎えているということにもなる。もしこれを、

⑫' いつごろ行きますか。

⑭' ええ、どうぞ行ってください。

としたら、話し手は、動作主の到着を、到着地点以外の場所でながめていることになり、動作主の到着を迎えることにはならない。

話し手が意識の上でその立つ位置を移して、動作主の到着地点に立ってその動作をながめるということには、いくつかの制限があるようである。その詳細な分析は別の機会に譲るが、ひとつだけとりあげれば、話し手が動作主の場合には、意識の上の到着点を聞き手の位置に移すことはできないということがある。例えば、ドイツ語の *kommen* と比べてとき、

[12] Ich werde morgen um acht Uhr zu Ihnen kommen.

が、話し手 (=動作主) とはなれた場所にいる聞き手への発話だった場合に、

[12]' あした8時にあなたのところへ来ます。

とは、言えない。「行く」を用いなければならない。また、だれかに呼ばれて、「すぐいきます」と応答するときの、

[13] Ich komme!

という返事を「すぐ来ます」とすることはできない。

3.1.1.2. 「行く」について

「来る」の場合とちがって、話し手の意識の上での位置は問題とならない。話し手は、到着点以外の位置に立って動作主の移動行為を見ているからである。「来る」の場合は、その移動行為がある一点に収束する意味合いがあり、話し手はその収束点に立っているわけであるから、一般的に、動作主が話し手に近づくという行為であるのに対して、「行く」の場合は、その移動行為の到着地点は話し手以外の場所にあるわけであるから、いわば発散する意味合いがあり、その移動行為は、話し手から離れていくという状況にあ

ると言える。

3.1.2. 「行く」「来る」の用法について

この映画で提示されている「行く」「来る」には構文論的にふたつの用法がある。単独で用いられる場合と、「動詞＋て＋いく／くる」と複合して用いられる場合とである。

3.1.2.1. 単独で用いられる場合

- ⑩ 今度、研究所へ行ってもいいですか。
- ⑫ 私も、油壺へ行きます。
- ⑬ いつごろ来ますか。
- ⑭ ええ、はじめて来ました。

などのような用法である。

「行く」「来る」という行為の目的を示すには、「動詞の連用形＋に＋いく／くる」という形式が用いられる。

- ⑮ いま、友達が車で迎えに来ます。
- ⑯ 山田さんは、いま、お昼ごはんを食べに行っています。
- ⑰ ちょっと、海を見に行きましようか。

このほか、動詞の連用形のところに、各種の動作を示す名詞を入れて、「行く」「来る」の目的を示すこともできる。

- 〔14〕 いま、食事に行っています。
- 〔15〕 デパートへ買物に行きます。

3.1.2.2. 「動詞＋て＋いく／くる」の場合

「ていく」「てくる」の用法について、明快な基準でこれをいくつかに分類し記述することは容易ではない。意味のちがいが、文法的な働きのちがいが連続的に変化し、境界を引くことが難しいからである。観点としては、いくつかあると考えられるが、ひとつには、「いく」「くる」が前部分の「動詞＋て」の動詞と対等な構文論的レベルにある動詞であるか、動詞に支配される補助動詞であるかという観点があげられよう。この観点も、構文論的なようであり、その区別は多分に意味によるところが多い。多少とも形態構文論

的に見れば、「動詞＋て」と「いく」「くる」との間に、何か別な要素が入りうるか否かという点があるか。また、「動詞＋て」と「いく」「くる」が対等な関係にある場合にも、「動詞」と「いく」「くる」のふたつの行為が、同時に行われるか、前後して行われるかによって分ける考え方もあるが、それは前部にある動詞の意味的特徴によるのであって、「動詞＋て＋いく／くる」の構文論的特徴とはならないと考えられる。以上のような点を考慮に入れて、この映画で提示されている「動詞＋て＋いく／くる」の例を見ればつぎのようになろうか。

a.

㉟ 何か飲物を買ってきませんか。

㊱ ジュースを買ってきました。

この場合、「買う」という行為に続いて「くる」という行為がなされるわけで、「買う」と「くる」はそれぞれ独立した行為と考えることができる。

a'.

㉡ いっしょに乗っていきませんか。

㉢ すぐ帰ってきます。

㉣ ほら、向こうから歩いてきます。

㉤ あっ、これを持って来ました。

㉥ 波の音がここまで聞こえてきますね。

などに見られる「いく」「くる」は、前部分の動詞の行為と同時に行われているとみなすことができる。その点、a. の場合とやや相違が見られると言えよう。しかし、a, a'.いずれの場合も、「買って、そののち、こちらに来る」、「乗って、油壺へいく」「持って、こちらへ来る」のように「いく」「くる」は動作主の行為として実現されるわけで、いわゆる本動詞と考えることができよう。

b.

これに対して以下に示す例に用いられている「いく」「くる」は動作主の移動行為を直接示すのではなく、「動詞＋て」の動作が行われる様態、すな

わち動詞のアスペクトを示す機能を持つと考えられる。

- ③⑦ もうすぐ、右側に海が見えてきますよ。
- ③⑧ あっ、見えてきましたね。
- ③⑨ ええ、学生のころからえびの研究をしてきました。
- ③⑩ そうすると、えびは、しだいに増えてきます。
- ③⑪ おや、波が出てきましたね。
- ③⑫ 午後は、いつも波が出てくるんですよ。
- ③⑬ このように、プランクトンが増えていきます。
- ③⑭ そうすると、えびは減っていきます。
- ③⑮ しかし、プランクトンが減っていきます。
- ③⑯ これからも、えびの研究をしていくんですか。
- ③⑰ ええ、続けていきます。

これらの例に示される「いく」「くる」は、動作主の空間的移動ではなく、時間軸上の推移を示していると考えることができよう。すなわち、話し手の立っている時間軸上のある一点から見て、それよりも過去からその点に向かって物事が進行、推移する様を話し手の方へ近づいてくるものと考え、これを「動詞+て+くる」と表し、逆に、話し手の立っている点から未来へ向かっての動きを、話し手から遠ざかる動きととらえて、「動詞+て+いく」と表すと言うことができよう。a, a' で示した「いく」「くる」の意味は空間的な移動を中心に考えたものであり、ここで言う時間的な移動、ないしは、経過という意味の側面と合致しないが、空間的移動が時間軸の上に投影され、話し手によって、時間軸上の推移があたかも空間的な距離の移動のごとくに認識されていると考えることにする。

その際、話し手の立つ位置、いわば時間軸上の deixis の原点は、自由に動かすことができる。

③⑦, ③⑧の例は、見えない状態から見える状態への変化を、話し手が見えるようになった状態の時点に立って記述し、「見えてくる」と表しているものと考えられる。また、③⑨, ③⑩の例も波が出ていない状態から波がたつ状態へ

の変化を、その変化が生じてしまった時点に立って見、記述しているということになる。㉔も同様である。「見える」「出る」「増える」という動詞のアスペクトのひとつを示していると言うことができよう。「見えはじめる」「出はじめる」などと似た、いわば「生起」のアスペクトといったような機能を考えることができよう。

㉕においても、話し手は「する」という行為のなりゆきを時間の軸の上に投影し、その行為が過去から継続して行われ、話し手の立っている現時点へ時間軸の上を近づいてくるものとして見ている。その意味で、「動詞+て」の動作の行われる様態を表すアスペクトの機能を果たしていると言えよう。㉗、㉘、㉙などと異なる点は、ない状態からある状態への変化という点に注目点がなく、その行為が現時点に向かって継続してきたという点に注目した様態の記述であるということである。

「ていく」については、逆に、その行為が話し手の立っている時点から後、つまり、未来へ向かって進行していくというアスペクトを示していると言えよう。㉚、㉛では、話し手の立っている現在から未来への継続を示している。㉜、㉝、㉞の「ていく」は、話者の立っている時点ではそれまでなかったものが、その時点から将来に向かって「増える」「減る」という行為が発生し継続されていくという行為の継続の側面をとらえたもので、㉗の「見えてくる」、㉘の「増えてくる」、㉙の「出てくる」と対比されるものであろう。すなわち、同じ行為を、結果の時点に立って見ているか、生じた時点に立ってなりゆきを見ているかという話し手の立っている位置の相違に還元される対立ととらえられる。

なお、同じように継続というアスペクトを示す「ている」と比べてとき、「ている」は、単に継続のみに注目し、話し手の立って見ている時点については中立である。いわば無方向の継続アスペクトを示すのに対して、これら「ていく」「てくる」は、話し手の立っている時点から相対的に未来の方を向いているか、過去の方を見ているかという方向性をもった継続アスペクトを示すということができよう。

3.2. 動詞による連体修飾

すでに述べた通り連体修飾については、映画解説6「しずかな こう えんで」(P.36~P.37)で一応の整理がなされている。参照されたい。この映画では、動詞による連体修飾が提示されている。

- ⑮ あのー、油壺へ行くバスは、どこでしょうか。
- ⑰ ほら、向こうへ行くバスです。
- ⑱ 今度出るバスは、たしか、一時ですよ。
- ㉑ 向こうから来る黒い車です。
- ㉓ あそこに見える建物が研究所です。

の五例である。

日本語の動詞による連体修飾を説明する方法は、文法論の立場によってさまざまあるが、現象的には、つぎのような諸点が特徴として挙げられよう。

- (i) 関係代名詞、接続詞等の仲介物(ドイツ語でいう Korrelat)は一切用いられない。
- (ii) 連体修飾の位置に立つ動詞は、原則として、被修飾名詞の直前に来る。
- (iii) 連体修飾の位置に立つ動詞に支配される要素は、すべてその動詞の前に置かれる。
- (iv) 連体修飾文に含まれる諸要素の生起には、いくつかの制限が見られる。
- (v) 連体修飾をする動詞と被修飾名詞との構文論的、意味的關係はさまざまな可能性がある。

3.2.1. 3.2.の(i), (ii), (iii)について

関係詞等の Korrelat を一切用いないという点は、ヨーロッパ諸語との大きな相違点のひとつであろう。英語などには、関係代名詞のない関係詞節や、接続詞のない従属節などが見られるが、それらは、本来あるものが省略されていると解されるから、ヨーロッパ諸語では、一般的に、連体修飾文は関係詞等の仲介物を介して名詞に接続されると言うことができよう。これに対して、日本語では、そのような Korrelat は何もなく、動詞に直接名詞が続く。このことから、日本語動詞の連体修飾は、機能的にはヨーロッパ諸語

の関係詞節には同じ動詞をとしているにもかかわらず、関係詞文（あるいは節）という名称は与えられないわけである。

被修飾名詞は、必ず、連体修飾動詞の後へ置かれる。その間には、他の要素は原則として入れない。入りうるものは、同じ名詞を同時に連体修飾する別な連体修飾要素である。

㊸ 向こうから来る黒い車です。

㊹ あそこに見えるあの白い建物が研究所です。

ヨーロッパ諸語においては、一般に関係詞節は、先行詞、あるいは、headと呼ばれる被修飾名詞の後に接続すると言えるから、この点にも、日本語の動詞による連体修飾の特徴があると言えよう。

逆に言えば、動詞に支配される諸要素はすべてその動詞の前に置かれるということになる。以上のことを、ドイツ語を例にして対比して図式で示すと、下のようにならうか。Nは被修飾名詞、Vは連体修飾の位置に立つ動詞、Xは動詞Vに支配される諸要素、Kは Korrelat をそれぞれ示す。[] は構文論的なあるレベルを示す。

日本語： [X V]N

⑮ $\frac{\text{油壺へ}}{X} \frac{\text{行く}}{V} \frac{\text{バス}}{N}$

ドイツ語： N[[K]X V]

⑮' $\frac{\text{der Bus}}{N}, \frac{\text{der}}{K} \frac{\text{nach Aburatsubo}}{X} \frac{\text{fährt.}}{V}$

ということになる。なお、Xは必要に応じていかにようにも増やすことができるのはいうまでもない。また、ドイツ語においてはXVという順になっているが、他のヨーロッパ語ではいくつかの順がありうる。

上で「油壺へ行く」の部分、あるいは、ドイツ語の der nach Aburatsubo fährt の部分を「文」とみなすかどうかは、文法論により異なるが、ここでは動詞を含む一連のまとまりという点に注目して、一応、連体修飾文とみなすことにする。連体修飾文にあたるドイツ語として、上では、関係代名詞文をあげたが、連体修飾文の種類によっては他にもいくつかの対応する形式が

ある。ここでは、そのいちいちについて詳しく論じることはしない。

3.2.2. 3.2.の(iv)について

連体修飾文に含まれる諸要素の生起にみられるいくつかの制限のうち、動詞の下位文法範ちゅうについては、モドゥスに関わる部分があげられる。いわゆる直説法に含められる形が連体修飾として許され、誘いかけ、命令、あるいは推量のモドゥスを示す形は許されないと言えよう。例を示す。* 印は、不可能な文であることを示す。? は、疑わしいことを示す。

- [16] きのう乗ったバス (直説法)
- [17] * 朝早く乗りましょうバス (誘いかけ)
- [18] * 朝早く乗りなさいバス (命令)
- [19]? 朝早く乗っただろうバス (推量)
- [20]? 再び襲ってきたであろう経済危機 (推量)

推量については、異論があろうか。[19]はともかくとして、[20]あたりは硬い文章などには見られることは否定できない。ヨーロッパ語の翻訳の影響によるものと考えられるが、不自然な感じはいなめない。教育という立場からは、原則として、推量は連体修飾に立たないとしておく。

動作主の願望を示す「たい」は連体修飾に立ちうる。

- [21] 油壺へ行きたい佐藤さん

は日本語文として完全である。このことは、願望を示す「たい」はモドゥスに関わる、誘いかけ、推量などとは異なった構文論的分布を示していることを示し、したがって、逆に、「たい」、あるいは願望表現は、モドゥスの範ちゅうに入らないということの証左とすることができる。

このほか、順不同にみると、

- [22]? 油壺へ行くらしいバスが出ました。
- [23]? 今度出るようなバスはありません。
- [24] * 油壺へ行くそんなバス

cf.

- [24]' 油壺へ行きそんなバス

〔20〕 油壺へ行くかももしれないハハを待っている。

〔26〕 油壺へ行くはずのバス

などが問題となろう。いずれも、文末のモダリティを示す形式である。〔22〕, 〔23〕, 〔25〕は多少問題があるが、認められようか。いずれもモドゥスとしては直説法であるから成立するということであろうが、どこか不自然な感じのする点に何か問題が含まれていると考えられる。〔24〕は不可能としてよからう。「行くそうだ」が形の上では、直説法でありながら連体修飾が不可能であるということは、この「そうだ」が動詞の単なる下位範ちゅうを示すものではないということの意味しているのではなく、動詞とは異なった構文論的レベルにあるということの証拠を提していると言えよう。〔26〕も同様である。「はずだ」は、モドゥスとしては直説法に属していながら「行くはずな」という連体修飾が不可能なことは、「はずだ」が動詞の下位範ちゅうとは異なったレベルのものであることを示している。「のだ」なども同様のことが言えよう。これらを、文全体を統括する構文論的機能の面からどのように位置づけるかについては別の機会に譲りたい。

また、文末のモダリティを示す終助詞も連体修飾には立てない。

〔27〕* 油壺へ行きますよバス

〔28〕* 油壺へ行きますねバス

動詞の前に置かれる構文論的要素のうちで、連体修飾文の中に入れないものは、いわゆる間投詞の類、文副詞といわれるものの類、接続詞などである。

〔29〕* 私はオヤッ油壺へ行くバスを待っています。

〔30〕* これはキット油壺へ行くバスですか。

〔31〕* 私はしかし油壺へ行くバスを待っています。

連体修飾文に入りうるか否かという点は、逆に、副詞が文副詞であるか、動詞修飾副詞であるかを定める基準とすることができる。

〔32〕 やっと来たバス

〔32〕は「やっ」とバスが来た」が基にある文で、「やっ」とは文副詞でないということになる。

3.2.3. 3.2の(v)について

連体修飾文のなかに被修飾名詞を戻してみても文が成立するかどうかで、両者の関係を大きく二類に大別することができる。

A. 被修飾名詞を連体修飾文の中に戻せる場合

[33] a. 油壺へ行くバス

→ b. バスが油壺へ行く。

[34] a. 私が乗るバス

→ b. 私がバスに乗る。

[35] a. 私が買った本

→ b. 私が本を買った。

[36] a. パンを焼く粉

→ b. 粉でパンを焼く。

[37] a. 私が出てきた町

→ b. 私が町から出てきた。

→ c. 私が町へ出てきた。

[38] a. 私がでかける朝

→ b. 私が朝でかける。

これらの例で示したように、各例の a. にある被修飾名詞は、b., c. に示されるように、もとの連体修飾文の構造の中にはめこむことができる。その際、その名詞は連体修飾文の構造にしたがって、その文の中でいわゆる主格、目的格、与格、場所格、時間を示す副詞句等のさまざまな構文論的機能を果たしうる。この各例の b., c. の文中での機能が、その名詞が被修飾名詞となって文の外へ出たときの連体修飾文との関係の解釈に、いわば、投影されていると考えるわけである。被修飾名詞の連体修飾文中での構文論的役割を決める操作的な手段はない。その名詞と、連体修飾文、とりわけ、その動詞との意味的な関係、発話の状況、文脈などから見て、もっともふさわしいものを選ぶしかない。[37]では b., c. の両方とも可能であり、ambiguity がある。[36]の例では、

[36] c. 粉がパンを焼く。

のように「粉」を主格に置くことも可能であるが、聞き手の解釈の段階で、c.の可能性はb.に比べて極端に低いとして退けられ、そこにある ambiguity は見かけ上解消され、コミュニケーション上の混乱は回避されるわけである。

被修飾名詞を連体修飾文の中に戻す操作をするとき、そのままの形では戻しにくいものがある。たとえば、

[39] a. 佐藤さんが油壺へ行く日

→ b.* 佐藤さんが日に油壺へ行く。

→ c. 佐藤さんがある日(その日)油壺へ行く。

[40] a. 佐藤さんがバスに乗った場所

→ b.* 佐藤さんが場所でバスに乗った。

c. 佐藤さんがある場所(その場所)でバスに乗った。

のようなものである。「日」、「場所」といった名詞は、何らかの限定詞を付加されないと裸では用いられない。a.の文では、連体修飾文がその役割を果たしているわけであるが、これらが文中に戻された場合は、「その」なり「あの」なりの限定詞が必要になるのである。

一方、ある文から連体修飾文と被修飾名詞の結合を得るには、原則として、文中の名詞を後置すればよい。その際、文の成文の中で、被修飾名詞となって後置され得ないものがいくつかある。

[41] a. 佐藤さんが井上さんと油壺へ行く。

→ b.* 佐藤さんが油壺へ行く井上さん

[42] a. 山田さんが研究員になった。

→ b.* 山田さんがなった研究員

のような例がそれである。これらがなぜ不可能かという説明は、いまのところうまくできないといわざるを得ない。これら、いくつかの制限を除いて、文中の名詞はかなり自由に後置され、被修飾名詞となることができる。

なお、文中の名詞が後置される場合、その格表示は解消して助詞は除か

れ、後置された後のさらに大きなレベルでの文中の役割にしたがった格表示たる助詞等が付加されることは言うまでもない。

B. 被修飾名詞を連体修飾文の中に戻せない場合

[43] a. 佐藤さんが油壺へ行く話

→ b. 話で（から、まで、……）佐藤さんが油壺へ行く。

[44] a. ドアを閉める音

b. 音が（で、に、から……）ドアを閉める。

このふたつの例のように、形の上ではさきにA.でとりあげた連体修飾と同じ構造を示しながら、さきの場合のように、連体修飾文の中へ戻せない被修飾名詞がある。戻せるか戻せないかは、個々の名詞固有の性格ではもちろんなく、その名詞と、それを修飾する文との意味的な関係に依存している。この種の連体修飾構造は、文法的立場によっては、「補文」と呼ばれることがある。

被修飾名詞に、「まえ」「あと」「とき」「場合」「際(さい)」「うえ」「ところ」等の、実質というよりは関係を表す名詞を用いて、文を名詞化することができる。これらの関係を表す名詞の意味的特性にしたがって、名詞化された文は、さらに上のレベルの文の中でさまざまな機能を果たすことができる。

[45] 佐藤さんが油壺へ行くまえ（とき、場合、際……）

いわゆる形式名詞を用いて名詞文を作ることでも連体修飾という観点から説明されよう。

[46] 佐藤さんが油壺へ行ったことは知りませんでした。

[47] 油壺へ行くのは来月のはじめごろです。

「まえ」「とき」「場合」等を形式名詞と呼ぶかどうかは、この課の問題ではないので深入りはしない。これらは、形式名詞に入れられることが一般のようであるが、「こと」や「の」ほど、「関係のみを示す」機能が強くなく、時や場所という多少とも実質的意味を担う機能も果たしている。何ををもって形式名詞と言うかは、なお、問題のあるところである。

形式名詞と似た形で連体修飾のような構造を呈するものに、「ほど」「だけ」などがある。

〔48〕 バスで行くほど遠くではありません。

〔49〕 持てるだけ持っていきなさい。

これらの「ほど」「だけ」は、さらに上のレベルの文の要素としての働きに限りがあって、「名詞的」な機能を示さない。国文法では副助詞として、形式名詞と区別する所以がそこにある。

同じ形式名詞であっても、「もの」「の」「こと」には、上記A.の機能を呈する場合がある。

〔50〕 佐藤さんが行ったのは水産研究所です。

〔51〕 佐藤さんが井上さんに話したことを山田さんに伝えました。

これら「の」「こと」は、一方では、実質を表す何らかの名詞の代わりを果たしている。たとえば、「の」は「ところ」、あるいは、「建物」と考えるのが自然であり、「こと」は何かの話の内容全体を指していると考えてさしつかえない。

他方、これら「の」「こと」は、そのままの形で連体修飾文に戻すことはできないが、「の」「こと」が指していると考えられる何かに代えてやると、戻すことができる。

〔50〕'b. 佐藤さんが建物に行った。

→ a. 佐藤さんが行った建物は水産研究所です。

→ a'. 佐藤さんが行ったのは水産研究所です。

〔51〕の「こと」についても、これをたとえば「話」に代えてみれば、〔50〕'と同一操作が可能である。

これら「の」「こと」は、単なる被連体修飾名詞とは異なった様相を示すもので、形式名詞の働きのひとつとして注意が必要である。

3.3. 練習問題

まず「行く」「来る」の練習問題の例をあげる。

A-1 例にならって、言いなさい。

(例) バス → $\left\{ \begin{array}{l} \text{バスがむこうからきます。} \\ \text{バスがむこうへいきます。} \end{array} \right.$

a. でんしゃ b. くるま c. ふね d. タクシー e. ちかてつ
f. しんかんせん g. きしゃ h. やまださん i. さとうさん

A-2 例にならって、言いなさい。

(例) バス, がっこう → $\left\{ \begin{array}{l} \text{さとうさんは, バスでがっこうへいきました。} \\ \text{さとうさんは, バスでがっこうへきました。} \end{array} \right.$

a. くるま, だいがく b. しんかんせん, とうきょう c. ちかてつ, ぎんざ
d. でんしゃ, あぶらつぼ e. タクシー, けんきゅうじょ
f. ひこうき, にほん g. あるいて, ともだちのりょう h. はしって
としょかん i. いそいで, えき

A-3 例にならって、言いなさい。

(例) ともだち, がっこう → $\left\{ \begin{array}{l} \text{さとうさんは, ともだちとがっこうへいきました。} \\ \text{さとうさんは, ともだちとがっこうへきました。} \end{array} \right.$

a. やまださん, だいがく b. いのうえさん, ぎんざ c. りょうのともだち, とうきょう
d. だいがくのともだち, ぎんざ e. みんな, けんきゅうじょ
f. ひとり(で), あぶらつぼ

B-1 例にならって、言いなさい。

(例) うみをみる → $\left\{ \begin{array}{l} \text{うみをみにいきましよう。} \\ \text{うみをみにきました。} \end{array} \right.$

a. ともだちをむかえる b. ともだちをおくる c. ともだちをよぶ
d. ともだちにあり e. ほんをかう f. ラーメンをたべる

B-2 例にならって、言いなさい。

(例) かいもの → {かいものについてもいいですか。
かいものにきました。

a. しょくじ b. おみまい c. べんぎょう d. りょうこう e. そうじ

C-1 例にならって、言いなさい。

(例) がっこう → もうがっこうへいっています。

a. だいがく b. とうきょう c. けんきゅうじょ d. ともだちのりょう
e. としょかん f. あぶらつぼ

C-2 例にならって、言いなさい。

(例) バス → バスは、さっきいってしまいました。

a. でんしゃ b. きしゃ c. しんかんせん d. やまださん e. さとうさん

D-1 例にならって、言いなさい。

(例) がっこう → いま、がっこうにきています。

a. だいがく b. とうきょう c. ぎんざ d. けんきゅうじょ e. あぶらつぼ
f. ともだちのりょう

D-2 例にならって、言いなさい。

(例) とうきょう → とうとう、とうきょうまでできてしまいました。

a. にほん b. あぶらつぼ c. ほっかいどう d. きゅうしゅう
e. アメリカ

ここで「___ていく」「___てくる」の言い方の練習例をあげる。

E-1 次にらって、以下の動詞に「ていきます」「ていきません」「ていきました」「ていきませんでした」を付けて言いなさい。

(例) かう→かっていきます/かっていきません/かっていきました/
かっていきませんでした。

a. あるく b. もつ c. かえる d. のる e. だる f. へる
g. ふえる h. けんきゅうする

E-2 例にならって、以下の動詞に「てきます」「てきません」「てきました」「てきませんでした」を付けて言いなさい。

(例) かう→かってきます/かってきません/かってきました/かって
きませんでした。

a. あるく b. もつ c. かえる d. のる e. だる f. みえる
g. きこえる h. へる i. ふえる j. けんきゅうする

F-1 例にならって、言いなさい。

(例) おみやげを、かう→

{	おみやげをかっていきます。
	おみやげをかってきました。

a. バスにのる b. けんきゅうしつへ(から)かえる c. むこうへ(か
ら)あるく d. データーをもつ e. おそばをたべる

F-2 例にならって、言いなさい。

(例) けんきゅうをする→

{	いままで、けんきゅうをしてきました。
	これからも、けんきゅうをしていきます。

a. ふえる b. へる c. かんがえる d. つづける e. にほんでく
らす f. ひとりでいきる

G-1 例にならって、言いなさい。

(例) ジュース→ジュースをかっていきます。

a. ほん b. きょうかしょ c. ノート d. ビール e. ウィスキー

G-2 例にならって、言いなさい。

(例) バス→バスにのっていきませんか。

a. でんしゃ b. タクシー c. ちかてつ d. じてんしゃ e. わたし
のくるま

G-3 例にならって、言いなさい。

(例) プラントン→これからも、プラントンのけんきゅうをしてい
きます。

a. にほんご b. ぶんぼう c. げんごがく d. にほんぶんか e.
にほんのれきし f. にほんのぶんがく g. ほうりつ h. えび i.
すいさん

H-1 例にならって、言いなさい。

(例) ジュース→ジュースをかってきました。

a. ほん b. きょうかしょ c. ノート d. ビール e. ウィスキー

H-2 例にならって、言いなさい。

(例) これ→あのー、これをもってきました。

a. ほん b. きょうかしょ c. ノート d. データー e. グラフ
f. おみやげ

H-3 例にならって、言いなさい。

(例) うみ→もうすぐ、うみがみえてきますよ。

a. とうきょう b. きょうと c. おおさか d. あぶらつぼ e. に
ほん f. けんきゅうじょ

H-4 例にならって、言いなさい。

(例) なみのおと→おや、なみのおとがきこえてきますね。

a. ひとのこえ b. くるまのおと c. おてらのかね d. はなしごえ
e. わらいごえ

H-5 例にならって、言いなさい。

(例) プラントン→ずっと、プラントンのけんきゅうをしてきました。
た。

a. にほんご b. ぶんぼう c. げんごがく d. にほんぶんか e.
にほんのれきし f. にほんのぶんがく g. ほうりつ h. えび i.
すいさん

次に動詞による連体修飾の練習問題の例をあげる。

I-1 例にならって、言いなさい。

(例) これは、バスです。
(この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
いくバスです。

a. これは、でんしゃです。(この)でんしゃは、あぶらつぼへいきます。
b. これは、しんかんせんです。(この)しんかんせんは、おおさかへいき
ます。
c. (あれは)くろいくるまでです。(その)くるまは、むこうからきます。
d. (あれは)あかとみどりのバスです。(その)バスは、むこうへいきま
す。
e. (あの)たてものは、けんきゅうじょです。(あの)たてものは、あそこ
にみえます。
f. (あの)えきは、とうきょうえきです。(あの)えきは、あそこにみえま
す。

I-2 例にならって、上の a. ~ f. を疑問形で言いなさい。

(例) これは、バスです。
(この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
いくバスですか。

I-3 例にならって、上の a. ~ f. を否定形で言いなさい。

(例) これは、バスです。
(この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
いくバスではありません。

J-1 例にならって、言いなさい。

(例) これは、バスです。
 (この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
 いくバスです。

- a. これは、バスです。わたしが(この)バスにのります。
 b. これは、ほんです。わたしが(この)ほんをかいます。
 c. ここは、あぶらつぼです。わたしがあぶらつぼへいきました。
 d. ここは、あぶらつぼです。わたしがあぶらつぼから(やっ)てきました。

J-2 例にならって、上の a. ~ d. を疑問形で言いなさい。

(例) これは、バスです。
 (この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
 いくバスですか。

J-3 例にならって、上の a. ~ d. を否定形で言いなさい。

(例) これは、バスです。
 (この)バスは、あぶらつぼへいきます。 } → これは、あぶらつぼへ
 いくバスではありません。

最後に総合練習の問題例をあげる。

K 例にならって、言いなさい。

(例) あぶらつぼ → { I : あぶらつぼへいくんですか。
 R : はい。
 I : わたしもあぶらつぼへいきます。
 R : じゃあ、いっしょにいきましょう。

- a. とうきょう b. きょうと c. おおさか d. しんじゅく e. ぎんざ

L 例にならって、言いなさい。

(例) あぶらつぼ、
 すいさんけん
 きゅうじょ → { I : あぶらつぼへは、はじめてきたんですか。
 R : ええ、はじめてきました。
 I : いま、どちらへいくんですか。
 R : すいさんけんきゅうじょへいきます。

- a. とうきょう, ホテル b. きょうと, りょかん c. おおさか, えき
d. しんじゅく, しんじゅくビル e. ぎんざ, ぎんざさんちょうめ

M-1 例にならって, 言いなさい。

(例) うみをみる → { I: ちょっと, うみをみにいきましようか。
R: そうですね。

- a. ともだちをむかえる b. ともだちをおくる c. ラーメンをたべる
d. ほんをかう e. べんぎょうをする

M-2 例にならって, 言いなさい。

(例) テレビをみる → { I: ちょっと, テレビをみにいきませんか。
R: はい, すぐいきます。

- a. ともだちにあう b. べんぎょうをする c. あそぶ d. あたらしい
ほんをみる e. ラーメンをたべる

N-1 例にならって, 言って下さい。

(例) けんきゅうじょ → { I: こんど, けんきゅうじょへいってもいいですか。
R: どうぞきてください。
I: らいげつのはじめに, いってもいいですか。
R: ええ, どうぞきてください。

- a. りょう b. だいがく c. けんきゅうじょ d. きょうと e. おおさか

N-2 例にならって, 次の電話のやりとりをしなさい。

(例) やまださん, だんわしつ → { I: もしもし。
R: はい。
I: いま, やまださんがきているんです。
R: そうですか。

I : さとうさんも、だんわしつへはなしに{いき}ませんか。
 R : はい、すぐいきます。

- a. さとうさん、きゅうけいしつ b. いのうえさん、りょうのげんかん
 c. ともだち、だいがくのきゅうけいしつ d. せんばいのやまださん、けんきゅうしつ e. こうはいのさとうさん、だんわしつ

O 例にならって、言いなさい。

(例) けんきゅうじよ、しろい → { I : あそこにみえるたてものが、けんきゅうじよです。
 R : あのしろいたてものですね。
 I : ええ。

- a. ホテル、おおきい b. えき、ながい c. だいがく、しろい d. がっこう、はいいろの
 e. りょう、はいいろの e. やまのてビルディング、みどりいろの

P 例にならって、言いなさい。

(例) くるま → ああ、くるまがきました。ほら、むこうからくる、くるいくるまでです。

- a. でんしゃ、みどりの b. くるま、あおい c. タクシー、だいたい
 いろの d. ちかてつ、あかい e. バス、きいろとあおのせんの

Q 例にならって、言いなさい。

(例) やまださん、おひるごはんをたべる → { I : やまださんは、いま、おひるごはんをたべに
 いています。
 R : そうですか。
 I : すぐ、かえってきますよ。

〔R：そうですか。〕

- a. さとうさん, データをしらべる b. いのうえさん, グラフをとる
c. はるこさん, としょかんでほんをかりる d. なつこさん, あたらし
いじしょをみる e. あぎこさん, ともだちのおみまい

R-1 例にならって, 言いなさい。

(例) えび → { I: これからもえびのけんきゅうをしていくんですか。
R: ええ, つづけていきます。

- a. プラントン b. すいさん c. にほんご d. ぶんぼう e. に
ほんぶんか f. にほんのれきし g. にほんのせいじ

R-2 例にならって, 言いなさい。

(例) えび → { I: やまださんは, ずっとえびのけんきゅうをしているん
ですか。
R: ええ, がくせいのところからえびのけんきゅうをしてき
ました。
I: これからもえびのけんきゅうをしていくんですか。
R: ええ, つづけていきます。

- a. プラントン b. すいさん c. にほんご d. ぶんぼう e. に
ほんぶんか f. にほんのれきし g. にほんのけいざい

4. 参考文献

A. 「行く」「来る」に関するもの

- 大江三郎 1975 『日英語の比較研究——主観性をめぐって——』 南雲堂
—— 1979 「『感情導入』にかかわる日本語の特徴——英語との比較を
含めて——」 『文学研究』76 九州大学文学部
- 金田一春彦(編) 1976 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 久野 暉 1978 「来る・行く」 『談話の文法』 大修館
- サミエル淑子 1973 「アメリカ英語の go/come, take/bring と日本語の行
く/来るとの比較対照」 『日本語教育』18号
- 城田 俊 1978 「《いく・くる》について」 『北海道大学人文科学論集』14
- 高橋太郎 1969 「すがたともくろみ」 『教育科学研究会文法講座テキスト』
(『日本語動詞のアスペクト研究』に再録)
- 野沢素子 1975 「日本語の補助動詞『～て来る』『～て行く』と中国語の趨
向助動詞『～来』『～去』について」 『日本研究』4 慶応義塾大学国際
センター
- 牧内 勝 1979 「テンス, アスペクトおよびムード『～ていく』と『～て
くる』の文法」 『フェリス女学院大学紀要』14
- 三上勝夫 1975 「補助動詞『ゆく』『くる』の意味と用法」 『北海道大学
教育学部紀要』25
- 森口恒一 1975 「『行く』『来る』『いる』に関する一考察」 『国語国文』
44-3 京都大学文学部国語学会
- 森田良行 1968 「『行く・来る』の用法」 『国語学』75
—— 1977 『基礎日本語——意味と使い方——』 角川書店
- 安井 泉 1979 「come, go と『くる』, 『いく』——『共感』と『ダイク
シス再編成』——」 『言語文化論集』6 筑波大学
- 野入逸彦 1968 「“kommen” と『来る』」 『人文研究』19-6 大阪市立大
学文学部

吉川武時 1973 「現代日本語のアスペクトの研究」『Linguistic communication』9 Monash 大学 (『日本語動詞のアスペクト』に再録)

B. 連体修飾に関するもの

- 青井 潔 1970 「日本語の連体修飾構造」『中部工業大学紀要』5
- 浅見 徹 1965 「連体修飾」『口語文法講座2 各論研究』明治書院
- 井上和子 1976 「名詞句の構造」『変形文法と日本語・上』大修館
- 奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』大修館
- 神谷 馨 1968 「連体句の構造」『待兼山論叢』2 大阪大学文学部
- 川端善明 1959 「連体(→)」『国語国文』28—10 京都大学国文学会
- 北条淳子 1974 「連体修飾構文」『講座日本語教育』10 早稲田大学語学教育研究所
- 久野 暲 1973 「名詞節・形容詞節」『日本文法研究』大修館
- 高橋太郎 1959 「動詞の連体修飾法」『ことばの研究』(『国立国語研究所論集』1)
- 1965 「動詞の連体修飾法(2)——場所的な結びつきと状态的な結びつき——」『ことばの研究』2 (『国立国語研究所論集』2)
- 1974 「連体形動詞のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」『教育国語』39
- 1979 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』むぎ書房
- 寺村秀夫 1975 「連体修飾のシンタクスと意味——その1——」『日本語・日本文化』4 大阪外国語大学留学生別科
- 1977(a) 「連体修飾のシンタクスと意味——その2——」『日本語・日本文化』5 大阪外国語大学留学生別科
- 1977(b) 「連体修飾のシンタクスと意味——その3——」『日本語・日本文化』6 大阪外国語大学留学生別科
- 1978 「連体修飾のシンタクスと意味——その4——」『日本語

- ・日本文化』7 大阪外国語大学留学生別科
- 野沢素子 1976 「日本語の連体修飾語と中国語の定語について——教授法の立場から——」『日本研究』慶応義塾大学国際センター
- 細田和雄 1979 「同一名詞連体構造句の再生における優位性序列」『岡山大学教育学部研究集録』52
- 増淵常吉 1969 「連体あれこれ」『月刊文法』1月号

C. その他のもの

- 奥津敬一郎 1965 「『ダ』による述部代用化」『日本語教育』6
- 1978 「『ボクハウナギダ』の文法——ダとノ——」くろしお出版

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることを考慮して、かな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭辞「お」「ご」や、接尾辞「さん」「じ(時)」「ふん(分)」等は、見出し語として取り上げている。ただし「ごはん」や「今度」等は、そのまま見出し語に立っている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立っている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
 - 2.—4. 形容動詞は、「__な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—5. 「です」に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—6. 「このように」「そうすると」等は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—7. 「おねがいします」等、慣用的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
 - 2.—8. 接続助詞「て」や、それに「も」の付いた「ても」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 「けんぎゅう」等は、名詞である場合とサ変複合動詞である場合で下位分類した。
 - 3.—2. 「これ」は、その意味・用法によって下位分類してある。

3. —3. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。(本動詞の場合)「ます」形であるか、「____て」の形であるかで下位分類し、また常体での言い方は一語扱いにして別の分類にした。(補助動詞の場合) 補助動詞が違えば、下位分類してある。ただし、その意味・用法による下位分類はしていない。
3. —4. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」であるか「んです」であるかにより下位分類してある。
3. —5. 「はい」は応答語であるか、呼びかけ語であるかで下位分類してある。
3. —6. 助詞「か」「が」「から」等は、その意味・用法によって下位分類してある。また「ん」の場合は、それに上接する品詞の別、活用の別で下位分類してある。
4. 「ます」「ました」については文例の列举を省略し、文番号だけを示した。「ません」「ましょう」は省略していない。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字が付けてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には()で語の使用回数を示した。

ああ (1)

㉘ ああ、きました。

あおい〔青い〕 (1)

㉙ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

あかい〔赤い〕 (1)

㉙ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

あそこ (1)

㉚ あそこに見えるたてものがけんきゅうじょです。

あっ (4)

㉛ あっ、みえてきましたね。

㉜ あっ、かえってきましたよ。

㉝ あっ、これをもってきました。

㉞ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

あの (2)

㉟ あのしろいたてものですね。

㊱ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

あのー (1)

㊲ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

あぶらつぼ〔油壺〕 (3)

㊳ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

㊴ あぶらつぼへいくんですか。

㊵ わたしも、あぶらつぼへいきます。

ありがとう (3)

㊶㊷㊸ ありがとう。

ある (2)

(1)㊹ よんじっぶんもありますね。

(2)(1) こんなものもあるんですよ。

あるく〔歩く〕(1)

⑤1 ほら、むこうからあるいてきます。

いい(1)

①⑩ こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。

いく〔行く〕(16)

(1)④ そうですね、すぐいききます。

②③ わたしも、あぶらつぼへいきます。

③⑤ すいさんけんきゅうじょへいきます。

(2)⑧⑦ ちょっとうみをみにいきましようか。

(3)⑩⑥ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

④⑤ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

(4)⑩⑩ こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。

(5)②⑤ いっしょにのっていきませんか。

⑧⑩ このように、プランクトンがふえていきます。

⑧① そうすると、えびは、へっていきます。

⑧⑥ ええ、つづけていきます。

(6)⑩⑤ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

①⑦ ほら、むこうへいくバスです。

(7)②① あぶらつぼへいくんですか。

③④ どちらへいくんですか。

⑤⑤ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

いそがしい〔忙しい〕(2)

⑧⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

⑨⑨ ええ、すこしいそがしいです。

いち〔一〕(1)

⑩⑩ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

いつ(1)

⑫ izzoo kimasu ka.

izzoo ni [ichigo] (1)

⑮ izzoo ni no tte ikimasen ka.

izzoo (2)

⑯ ee, kyoo wa, izumo yori yoku kikoemasu.

⑰ gogo wa, izumo nami ga denkuru ndesu yo.

ima [ima] (6)

⑱ ima, yamada san ga kite iru ndesu.

⑲ eito, sono basu wa, ima itte shimaimashita yo.

⑳ ima, tomodachi ga kuru made mukae ni kimasu.

㉑ yamada san wa, ima, ohiro gohan o tabe ni itte imasu.

㉒ yamada san wa, ima, nani no kenkyuu o shite iru ndesu ka.

㉓ imaha, ebi to plankton no kankai o kenkyuu shite imasu.

irassharu (1)

㉔ yamada san wa, irasshai masu ka.

iru (6)

(1) ㉕ yamada san wa, ima, ohiro gohan o tabe ni itte imasu.

㉖ ebi no kenkyuu o shite imasu.

㉗ imaha, ebi to plankton no kankai o kenkyuu shite imasu.

(2) ⑳ ima, yamada san ga kite iru ndesu.

㉘ yamada san wa, ima, nani no kenkyuu o shite iru ndesu ka.

㉙ yamada san wa, zutto ebi no kenkyuu o shite iru ndesu ne.

ue [ue] (1)

㉚ aa, sumimasen ga, hoku no tsukue no ue kara aho no deata o motte kite kudasai.

umi [umi] (2)

㉛ mou sugu, mizu ga wa ni umi ga miete kimasu yo.

㉜ chotto umi o mi ni ikimashou ka.

ええ (10)

- ⑨ ええ、すこしいそがしいです。
⑪ ええ、どうぞ。
⑭ ええ、どうぞきてください。
⑳㉑㉒ ええ。
㉓ ええ、はじめてきました。
㉕ ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。
㉗ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。
㉙ ええ、つづけていきます。

えーと (1)

- ⑯ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

えび (8)

- ⑳ えびのけんきゅうをしています。
㉑ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。
㉒ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。
㉓ いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。
㉔ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。
㉕ そうすると、えびは、へっていきます。
㉖ そうすると、えびは、しだいにふえてきます。
㉗ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

お (3)

- (1)㉘ おきゃくさんですよ。

⑸ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

- (2)⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

おと [音] (1)

⑹ なみのおとがここまできこえてきますね。

おねがいします [お願いします] (2)

㉚㉛ じゃ、おねがいします。

おもしろい〔面白い〕(1)

84 おもしろいけんきゅうですね。

おや(1)

89 おや、なみがでてきましたね。

か(19)

(1)8 やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

12 いつごろきますか。

13 らいげつのはじめごろは、どうですか。

15 あの一、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

21 あぶらつぼへいくんですか。

32 こちらへは、はじめてきたんですか。

34 どちらへいくんですか。

44 やまださんは、いらっしゃいますか。

66 やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

85 これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

(2)2 さとうさん、だんわしつへきませんか。

25 いっしょにのっていきませんか。

59 なにかのみものをかけてきましようか。

87 ちょっとうみをみにいきましようか。

(3)10 こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。

(4)4 そうですか、すぐいきます。

36④⑤3 そうですか。

が(12)

(1)3 いま、やまださんがきているんです。

24 いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

39 あそこにみえるたてものがけんきゅうじょです。

79 このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

79 このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

- ⑧ このように、プランクトンがふえていきます。
- ⑨ しかし、プランクトンがへってきます。
- ⑩ おや、なみがでてきましたね。
- ⑪ ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。
- (2)⑫ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。
- ⑬ なみのおとがここまできこえてきますね。
- (3)⑭ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

かう [買う] (2)

- ⑮ なにかのみものをかってきましょうか。
- ⑯ ジュースをかってきました。

かえる [帰る] (2)

- ⑰ すぐかえってきます。
- ⑱ あっ、かえってきましたよ。

がくせい [学生] (1)

- ⑲ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。

から (5)

- (1)⑳ むこうからくるくろいくるまでです。
- ㉑ ほら、むこうからあるいてきます。
- ⑳ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。
- (2)㉒ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。
- ㉓ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

かんけい [関係] (1)

- ㉔ いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。

きこえる [聞こえる] (2)

- (1)㉕ ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。
- (2)㉖ なみのおとがここまできこえてきますね。

きやく〔答〕(1)

⑫ おきやくさんですよ。

きょう〔今日〕(1)

⑬ ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。

きれいな(1)

⑭ ほら、きれいでしょう。

ください〔下さい〕(2)

⑮ ええ、どうぞきてください。

⑯ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

グラフ(1)

⑰ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

くる〔来る〕(25)

(1)⑱ さとうさん、だんわしつへきませんか。

⑲ いつごろきますか。

⑳ ああ、きました。

㉑ ええ、はじめてきました。

㉒ やあ、よくきましたね。

(2)㉓ いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

(3)⑳ いま、やまださんがきているんです。

㉑ ええ、どうぞきてください。

(4)㉒ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

㉓ あっ、みえてきましたね。

㉔ すぐかえってきます。

㉕ あっ、かえってきましたよ。

㉖ ほら、むこうからあるいてきます。

㉗ なにかのみものをかってきましょうか。

㉘ あっ、これをもってきました。

- 64 なみのおとがここまできこえてきますね。
- 69 ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。
- 71 ジュースをかってきました。
- 82 しかし、プランクトンがへってきます。
- 83 そうすると、えびは、しだいにふえてきます。
- 89 おや、なみがでてきましたね。
- (5)74 あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。
- (6)29 むこうからくるくろいくるまでです。
- (7)32 こちらへは、はじめてきたんですか。
- 90 ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

くるま〔車〕(2)

- 24 いま、ともだちがくるまでむかえにきます。
- 29 むこうからくるくろいくるまでです。

くろい〔黒い〕(1)

- 29 むこうからくるくろいくるまでです。

けんきゅう〔研究〕(7)

- (1)84 おもしろいけんきゅうですね。
- (2)70 いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。
- (3)66 やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。
- 67 えびのけんきゅうをしています。
- 68 やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。
- 69 ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。
- 85 これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

けんきゅうじょ〔研究所〕(3)

- 10 こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。
- 35 すいさんけんきゅうじょへいきます。
- 39 あそこにみえるたてものがけんきゅうじょです。

ここ (2)

⑥2 ここは、しずかですね。

⑥4 なみのおとがここまできこえてきますね。

ごご [午後] (1)

⑦0 ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

こちら (2)

⑦2 こちらへは、はじめてきたんですか。

⑦8 どうぞ、こちらへ。

この (1)

⑦9 このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

このように (1)

⑧0 このように、プランクトンがふえていきます。

ごはん (1)

⑧5 やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

こまる [困る] (1)

⑨0 こまったなー。

これ (2)

(1)⑨1 あっ、これをもってきました。

(2)⑨5 これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

ころ [頃] (3)

(1)⑨9 ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。

(2)⑩2 いつごろきますか。

⑩3 らいげつのはじめごろは、どうですか。

こんど [今度] (2)

⑩⑩ こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。

⑩8 こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

こんな (1)

⑦⑦ こんなものもあるんですよ。

こんにちは (3)

⑤⑥⑦ こんにちは。

さいきん [最近] (1)

⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

さっ (2)

⑩⑪ さっ、どうぞ。

さとう [佐藤] (1)

② さとうさん、だんわしつへきませんか。

さん (8)

② さとうさん、だんわしつへきませんか。

③ いま、やまださんがきているんです。

⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

④④ やまださんは、いらっしゃいますか。

④⑤ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

⑤② おきゃくさんですよ。

⑥⑥ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

⑥⑧ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

じ [時] (1)

⑧ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

しかし (1)

⑫⑫ しかし、プランクトンがへってきます。

しずかな [静かな] (1)

⑬⑬ ここは、しずかですね。

しだいに (1)

⑬⑬ そうすると、えびは、しだいにふえてきます。

しまう (1)

⑬⑬ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

じゃ (2)

⑦⑩ ジャ、おねがいします。

ジュース(1)

⑦① ジュースをかってきました。

しろい〔白い〕(1)

④① あのしろいたてものですね。

すいさん〔水産〕(1)

③⑤ すいさんけんきゅうじょへいきます。

すぐ(3)

④ そうですか、すぐいきます。

③⑦ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

④⑥ すぐかえってきます。

すこし〔少し〕(1)

④① ええ、すこしいそがしいです。

ずっと(1)

③⑧ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

すみません(4)

②⑤⑩④② すみません。

⑦④ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

する(6)

(1)⑥⑥ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

⑥⑦ えびのけんきゅうをしています。

③⑧ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

⑥⑤ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

(2)⑦① いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。

(3)⑥⑨ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。

せん〔線〕(2)

⑦⑨ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

㉟ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

そう (4)

④ そうですか、すぐいきます。

㉞㉟㊱ そうですか。

そうすると (2)

③① そうすると、えびは、へっていきます。

③③ そうすると、えびは、しだいにふえてきます。

その (1)

①⑥ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

たしか [確か] (1)

①⑧ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

たてもの [建物] (2)

③⑨ あそこに見えるたてものがけんきゅうじょです。

④⑩ あのしろいたてものですね。

たべる [食べる] (1)

⑤⑮ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

だんわしつ [談話室] (1)

②⑲ さとうさん、だんわしつへきませんか。

ちょっと (1)

⑦⑳ ちょっとうみをみにいぎましようか。

つくえ [机] (1)

④⑲ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

つづける [続ける] (1)

⑧㉑ ええ、つづけていきます。

で (1)

④㉒ いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

データー (1)

- ⑦④ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもつてきてください。

でしょう(2)

- ⑮ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。
⑯ ほら、きれいでしょう。

です(28)

- (1)⑨ ええ、すこしいそがしいです。
⑰ ほら、むこうへいくバスです。
⑲ むこうからくるくろいくるまでです。
⑳ あそこにみえるたてものがけんきゅうじょです。
㉑ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。
(2)⑧ やまださん、さいぎんは、おいそがしいですか。
⑩ こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。
⑬ らいげつのはじめごろは、どうですか。
(3)④ そうですか、すぐいきます。
⑯⑰⑳ そうですか。
(4)⑥ ひさしぶりですね。
⑦ ほんとうにひさしぶりですね。
⑩ あのしろいたたものですね。
⑬ ここは、しずかですね。
⑱ おもしろいけんきゅうですね。
(5)⑮ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。
⑳ おきゃくさんですよ。
(6)③ いま、やまださんがきているんです。
(7)㉑ あぶらつぼへいくんですか。
㉒ こちらへは、はじめてきたんですか。
㉓ どちらへいくんですか。
⑯ やまださんには、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

- 85 これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。
(8)68 やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。
(9)77 こんなものあるんですよ。
90 ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

でる〔出る〕(3)

- (1)89 おや、なみがでてきましたね。
90 ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。
(2)18 こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

と(1)

- 70 いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。

どう(1)

- 13 らいげつのはじめごろは、どうですか。

どうぞ(6)

- 11 ええ、どうぞ。
14 ええ、どうぞきてください。
3068 さっ、どうぞ。
48 どうぞ、こちらへ。
73 どうぞ。

どこ(1)

- 15 あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

どちら(1)

- 34 どちらへいくんですか。

ともだち〔友達〕(1)

- 24 いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

な(1)

- 20 こまったなー。

なに〔何〕(1)

- 66 やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

なにか〔何か〕(1)

㉟ なにかのみものをかかってきましようか。

なみ〔波〕(3)

㊦ なみのおとがここまできこえてきますね。

㊧ おや、なみがでてきましたね。

㊨ ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

に(5)

(1)㊩ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

㊪ あそこにみえるたてものがけんきゅうじょうです。

(2)㊫ いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

㊬ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにいています。

㊭ ちょっとうみをみにいきましようか。

ね(11)

⑥ ひさしぶりですね。

⑦ ほんとうにひさしぶりですね。

⑧ よんじっぷんもありますね。

⑨ あっ、みえてきましたね。

⑩ あのしろいたてものですね。

⑪ やあ、よくきましたね。

⑫ ここは、しずかですね。

⑬ なみのおとがここまできこえてきますね。

⑭ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

⑮ おもしろいけんきゅうですね。

⑯ おや、なみがでてきましたね。

の(12)

(1)⑰ らいげつのはじめごろは、どうですか。

⑱ なみのおとがここまできこえてきますね。

⑲ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

- ⑥7 えびのけんきゅうをしています。
- ⑥8 やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。
- ⑥9 ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしました。
- ⑥9 ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしました。
- ⑦0 いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。
- ⑦4 あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。
- ⑦4 あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。
- ⑧5 これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

(2)⑦7 こんなのもあるですよ。

のみもの〔飲物〕(1)

- ⑤9 なにかのみものをかってきましょうか。

のる〔乗る〕(1)

- ②5 いっしょにのっていきませんか。

は (17)

- ⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。
- ⑬ らいげつのはじめごろは、どうですか。
- ⑮ あの一、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。
- ⑰ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。
- ⑱ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。
- ⑳ こちらへは、はじめてきたんですか。
- ④4 やまださんは、いらっしゃいますか。
- ④5 やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。
- ⑥3 ここは、しずかですね。
- ⑥5 ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。
- ⑥6 やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。
- ⑥8 やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

- ⑦⑩ いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。
- ⑦⑨ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。
- ⑧⑪ そうすると、えびは、へっていきます。
- ⑧③ そうすると、えびは、しだいにふえてきます。
- ⑨⑥ ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

はい(5)

(1)①④⑨⑦⑤ はい。(応答)

(2)⑦⑧ はい。(注意喚起)

はじめ〔初め〕(1)

⑬ らいげつのはじめごろは、どうですか。

はじめて〔初めて〕(2)

⑳ こちらへは、はじめてきたんですか。

㉑ ええ、はじめてきました。

バス(4)

⑮ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

⑯ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

⑰ ほら、むこうへいくバスです。

⑱ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

ひさしぶり〔久しぶり〕(2)

⑥ ひさしぶりですね。

⑦ ほんとうにひさしぶりですね。

ひる〔昼〕(1)

④⑤ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

ふえる〔増える〕(2)

⑩ このように、プランクトンがふえていきます。

⑧③ そうすると、えびは、しだいにふえてきます。

プランクトン(4)

⑦⑩ いまは、えびとプランクトンのかんけいをけんきゅうしています。

㉞ このグラフは、あおいせんがプランクトン、あかいせんがえびです。

㉟ このように、プランクトンがふえていきます。

㊱ しかし、プランクトンがへってきます。

ふん〔分〕(1)

㊲ よんじっぷんもありますね。

へ(10)

㊳ さとうさん、だんわしつへきませんか。

㊴ こんど、けんきゅうじょへいってもいいですか。

㊵ あのー、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。

㊶ ほら、むこうへいくバスです。

㊷ あぶらつぼへいくんですか。

㊸ わたしも、あぶらつぼへいきます。

㊹ こちらへは、はじめてきたんですか。

㊺ どちらへいくんですか。

㊻ すいさんけんきゅうじょへいきます。

㊼ どうぞ、こちらへ。

へる〔減る〕(2)

㊽ そうすると、えびは、へっていきます。

㊾ しかし、プランクトンがへってきます。

ぼく〔僕〕(1)

㊿ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデータをもってきてください。

ほら(3)

㊿ ほら、むこうへいくバスです。

㊿ ほら、むこうからあるいてきます。

㊿ ほら、きれいでしょう。

ほんとうに〔本当に〕(1)

㊿ ほんとうにひさしぶりですね。

ました (10) ⑭, ⑳, ㉓, ㉔, ㉕, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙, ㉚, ㉛, ㉜

ましょう (2)

㉞ なにかのみものをかってきましょうか。

㉟ ちょっとうみをみにいきましょうか。

ます (20) ④, ⑫, ⑰, ㉑, ㉒, ㉓, ㉔, ㉕, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙, ㉚, ㉛, ㉜, ㉝, ㉞,

㉟, ㊱, ㊲, ㊳, ㊴

ません (2)

㊵ さとうさん、だんわしつへきませんか。

㊶ いっしょにのっていきませんか。

まで (1)

㊷ なみのおとがここまできこえてきますね。

みえる [見える] (3)

(1) ㊸ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

㊹ あっ、みえてきましたね。

(2) ㊺ あそこにみえるたてものがけんきゅうじょうです。

みぎがわ [右側] (1)

㊻ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

みる [見る] (1)

㊼ ちょっとうみをみにいきましょうか。

むかえる [迎える] (1)

㊽ いま、ともだちがくるまでむかえにきます。

むこう [向こう] (3)

㊾ ほら、むこうへいくバスです。

㊿ むこうからくるくろいくるまでです。

㊿ ほら、むこうからあるいてきます。

も (4)

(1) ㊿ わたしも、あぶらつぼへいきます。

㊿ こんなもあるんですよ。

(2)⑱ よんじっぷんもありますね。

(3)⑳ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

もう (1)

㉗ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

もつ〔持つ〕(2)

㉘ あっ、これをもってきました。

㉙ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

やあ (1)

㉚ やあ、よくきましたね。

やまだ〔山田〕(6)

③ いま、やまださんがきているんです。

⑧ やまださん、さいきんは、おいそがしいですか。

④ やまださんは、いらっしゃいますか。

⑤ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

⑥ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

⑥ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

よ (7)

⑱ えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。

⑱ こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。

㉗ もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。

⑩ あっ、かえってきましたよ。

㉚ おきゃくさんですよ。

㉙ こんなもあるんですよ。

⑩ ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

よく (2)

㉚ やあ、よくきましたね。

㉙ ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。

より (1)

⑤ ええ、きょうは、いつもよりよくきこえます。

よんじゅう [四十] (1)

⑩ よんじっぶんもありますね。

らいげつ [来月] (1)

⑬ らいげつのはじめごろは、どうですか。

わたし [私] (1)

⑳ わたしも、あぶらつぼへいきます。

を (12)

④ やまださんは、いま、おひるごはんをたべにっています。

⑤ なにかのみものをかけてきましょうか。

⑥ あっ、これをもってきました。

⑦ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。

⑧ えびのけんきゅうをしています。

⑨ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。

⑩ ええ、がくせいのところからえびのけんきゅうをしてきました。

⑪ いまは、えびとプランクトンのかんけいけんきゅうをしています。

⑫ ジュースをかけてきました。

⑬ あっ、すみませんが、ぼくのつくえのうえからあのデーターをもってきてください。

⑭ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。

⑮ ちょっとうみをみにいきましょうか。

ん (9)

(1)① あぶらつぼへいくんですか。

② どちらへいくんですか。

③ こんなのもあるんですよ。

(2)④ こちらへは、はじめてきたんですか。

(3)⑤ いま、やまださんがきているんです。

- ⑥⑥ やまださんは、いま、なんのけんきゅうをしているんですか。
- ⑥⑧ やまださんは、ずっとえびのけんきゅうをしているんですね。
- (4)⑥⑤ これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。
- (5)⑨⑩ ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「なみのおとが きこえてきます」——「いく」「くる」——
企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16m/m E K カラー・スタンダード
巻 数 全1巻
上映時間 5分
現 像 所 東映化学
録 音 読売スタジオ
完 成 昭和54年1月10日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一
制作担当 佐 藤 吉 彦
脚 本 前 田 直 明
演 出 前 田 直 明
演出助手 高 橋 涉
撮 影 野 崎 嘉 彦
撮影助手 楡 真須美
照 明 伴 野 功
音 楽 吉 田 征 雄
録 音 小 川 正 城 (読売スタジオ)
ネガ編集 亀 井 正
配 役 佐 藤 榊 原 英 俊
山 田 金 尾 哲 夫
井 上 岡 田 吉 弘
吉 川 小 山 武 宏
岡 田 石 原 由 紀 子

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	テーマ・タイトル なみのおとが きこえてき ます ——「いく」「くる」——	
3	〈佐藤の部屋〉 ドアが開き、井上の顔がのぞ く (佐藤机の上をかたづけて、 部屋を出る)	佐藤「①はい。」 井上「②さとうさん、だんわ しつへきませんか。 ③いま、やまださんが きているんです。」 佐藤「④そうですか、すぐい きます。」
4	〈談話室〉 談話室に佐藤、入ってくる	佐藤「⑤こんにちは。 ⑥ひさしぶりですね。」
5	佐藤ナメ山田 M・S	山田「⑦ほんとうにひさしぶ りですね。」
6	山田ナメ佐藤 M・S	佐藤「⑧やまださん、さいき んは、おいそがしいで すか。」
7	佐藤ナメ山田 B・S	山田「⑨ええ、すこしいそが しいです。」
8	佐藤 B・S	佐藤「⑩こんど、けんきゅう じょへいってもいいで すか。」
9	三人 L・S	山田「⑪ええ、どうぞ。 ⑫いつごろきますか。」 佐藤「⑬らいげつのはじめご ろは、どうですか。」 山田「⑭ええ、どうぞきてく

10	〈駅前〉 改札口を出てくる佐藤	
11	男(吉川)に話しかける佐藤	佐藤「⑮あの一、あぶらつぼへいくバスは、どこでしょうか。」
12	佐藤ナメ吉川 B・S	吉川「⑯えーと、そのバスは、いまいってしまいましたよ。 ⑰ほら、むこうへいくバスです。」
13	走り去るバス	
14	佐藤ナメ吉川 B・S	吉川「⑱こんどでるバスは、たしか、いちじですよ。」
15	佐藤 B・S	佐藤「⑲よんじっぶんもありますね。」
16	吉川・佐藤 M・S	佐藤「⑳こまったなー。」 吉川「㉑「あぶらつぼへいくんですか。」 佐藤「㉒ええ。」 吉川「㉓わたしも、あぶらつぼへいきます。 ㉔いま、ともだちがくるまでむかえにきます。 ㉕いっしょにのっていきませんか。」 佐藤「㉖すみません。 ㉗じゃ、おねがいします。」 吉川「㉘ああ、 きました。 ㉙むこうからくるくるいくるまでです。」
17	走ってくる車	

- | | | |
|----|------------------------------|---|
| 18 | 車に近づく吉川 | 吉川「㉓さっ、どうぞ。」 |
| 19 | 車に乗り込む 二人 | 佐藤「㉔すみません。」 |
| 20 | <車内>
吉川 B・S | 吉川「㉕こちらへは、はじめてきたんですか。」 |
| 21 | 佐藤 B・S | 佐藤「㉖ええ、はじめてきました。」 |
| 22 | 吉川 B・S | 吉川「㉗どちらへいくんですか。」 |
| 23 | 佐藤 B・S | 佐藤「㉘すいさんけんきゅうじょへいきます。」 |
| 24 | 吉川 B・S | 吉川「㉙そうですか。」 |
| 25 | 車内、後姿の二人 | 吉川「㉚もうすぐ、みぎがわにうみがみえてきますよ。」 |
| 26 | 吉川 B・S | 佐藤「㉛あっ、みえてきましたね。」 |
| 27 | 海が見えてくる
(車の走り) | 吉川「㉜あそこにみえるたてものがけんきゅうじょです。」 |
| 28 | 車内、後姿の二人 | 佐藤「㉝あのしろいたてものですね。」 |
| 29 | 海の向こうに白い建物 | 吉川「㉞ええ。」 |
| 30 | <研究所内>
佐藤フレーム・イン、岡田に話しかける | 佐藤「㉟すみません。」
岡田「㊱はい。」
佐藤「㊲やまださんは、いらっしゃいますか。」
岡田「㊳やまださんは、いま、おひるごはんをたべていています。
㊴すぐかえってきます。」 |

31	水槽の魚（マツカサ魚）	佐藤「㉔てりですか。」
32	水槽の魚（フグ）	岡田「㉕どうぞ、こちらへ。」
33	岡田 B・S	佐藤「㉖はい。」
34	岡田ナメ歩いてくる岡田	岡田「㉗あっ、かえってきま したよ。
35	部屋に入ってくる山田	㉘ほら、むこうからあ るいてきます。」
36	あいさつする佐藤，二人座る	岡田「㉙おきゃくさんです よ。」
37	岡田 B・S	山田「㉚そうですね。
38	山田と佐藤 M・S	㉛ありがとう。
39	岡田フレームアウト	㉜やあ、よくきました ね。」
40	包を差し出す佐藤	佐藤「㉝こんにちは。」
41	受け取る山田	山田「㉞こんにちは。
42	フェニックスの向こうに海	㉟さっ、どうぞ。」
43	山田と佐藤 M・S	岡田「㊱なにかのみものをか ってきましようか。」
44	佐藤 B・S	山田「㊲じゃ、おねがいしま す。」
		佐藤「㊳あっ、これをもって きました。」
		山田「㊴ありがとう。」
		佐藤「㊵ここは、しずかです ね。
		㊶なみのおとがここま できこえてきますね。」
		山田「㊷ええ、きょうは、い つもよりよくきこえま す。」
		佐藤「㊸やまださんは、いま、

- なんのけんきゅうをし
ているんですか。」
- 45 山田 B・S 山田「⑥えびのけんきゅうを
しています。」
- 46 佐藤 B・S 佐藤「⑦やまださんは、ずっ
とえびのけんきゅうを
しているんですね。」
- 47 佐藤ナメ 山田 山田「⑧ええ、がくせいのか
ろからえびのけんきゅ
うをしてきました。
- 48 本を開く山田の手もと ⑨いまは、
えびとプランクトン
のかんけいをけんきゅ
うしています。」
- 49 岡田、ジュースを持って入っ
てくる。 岡田「⑩ジュースをかってき
ました。」
山田「⑪ありがとう。」
山田「⑫どうぞ。」
山田「⑬あ、すみませんが、
ぼくのつくえのうえか
らあのデーターをもっ
てきてください。」
岡田「⑭はい。」
山田「⑮ほら、きれいでしょ
う。
⑯こんなのもあるんで
すよ。」
岡田「⑰はい。」
山田「⑱このグラフは、あお
いせんがプランクト
ン、あかいせんがえび
です。
⑳このように、プラン
クトンがふえていきま
- 50 (岡田グラフを持ってくる)
グラフを開く手もと

		す。 ㊶そうすると、えびは、へっていきます。 ㊷しかし、プランクトンがへってきます。 ㊸そうすると、えびは、しだいにふえてきます。
51	山田入れ込み、佐藤	佐藤「㊹おもしろいけんきゅうですね。」 佐藤「㊺これからも、えびのけんきゅうをしていくんですか。」
52	山田 B・S	山田「㊻ええ、つづけていきます。」
53	立ち上がる二人	山田「㊼ちょっとうみをみにいきましようか。」
54	波打際に立つ二人	佐藤「㊽ええ。」 佐藤「㊾おや、なみができましたね。」 山田「㊿ごごは、いつもなみがでてくるんですよ。」
55	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社	

日本語教育映画解説 14

なみのおとが きこえてきます
—「いく」「くる」—

昭和56年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14
電話 東京(900) 3111(代表)

印刷所 神谷印刷株式会社
電話 (912) 2571